

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



第七十二卷

第七号

日本幼稚園協会



# 現幼研講師著書一覽

**三木安正先生**

**私の幼児教育論**

フレーベル新書 8

400円 千80円 B 6 変形 176頁

**年間保育計画**

350円 千110 B 5 172頁

**幼児教育の評価**

500円 千110 B 5 130頁

**海 卓子先生**

**幼児の生活と教育**

550円 千110 A 5 350頁

昭和41年度日私幼賞受賞

三木安正先生共著

**年間保育計画**

350円 千110 B 5 172頁

**幼児教育の評価**

500円 千110 B 5 130頁

**平井信義先生**

**幼児の精神衛生と保育**

600円 千110 A 5 224頁

〈保育学講座 8〉

**幼児の身体発育と保育**

1,200円 千140 A 5 320頁

**保育所保育指針の**

**展開と指導計画**

400円 千110 A 5 262頁

**藤田復生先生**

**幼児の造形〈紙〉**

1,000円 千140 A 5 224頁

**山村きよ先生**

**ことばの指導**

400円 千110 A 5 128頁

**両親のために**

100円 千35 A 5 46頁

**藤田妙子先生**

**7つのオペレッタ**

**5つのオペレッタ**

**3つのオペレッタ**

400円 千110 B 5 100～138頁

**自由表現ABC**

550円 千110 B 5 116頁

**続自由表現ABC**

550円 千110 B 5 142頁

**小林純一先生**

**あひるのぎょうれつ**

550円 千110 B 5 98頁

**新しい幼児の歌1・2・3**

各550円 千110 B 5 130頁

**磯部 俣先生**

**ごはんをもぐもぐ**

550円 千110 B 5 92頁

サンケイ児童出版文化賞推選図書

**新しい幼児の歌1・2・3**

各550円 千110 B 5 130頁

幼児のためのオペレッタ・ピース

ネズミの冒険

キカン車ミニミニ号の冒険

鳥の王さまコンテスト

森のうた

空をとぶハチミツ

ジャングルへ

とんできたベニスズメ

150～200円 千35 A 4 16頁

小鳥のはねやさん

200円 千35 A 4 20頁

**山内昭道先生**

**自然の教育**

450円 千110 B 5 116頁

**タイム・マシン**

200円 千35 A 4 20頁

昭和48年度テキスト

**海賊たちと宝島**

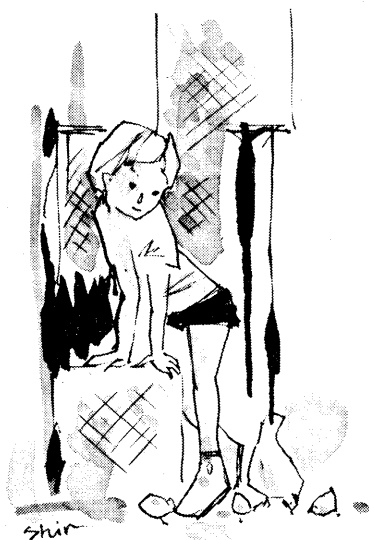
300円

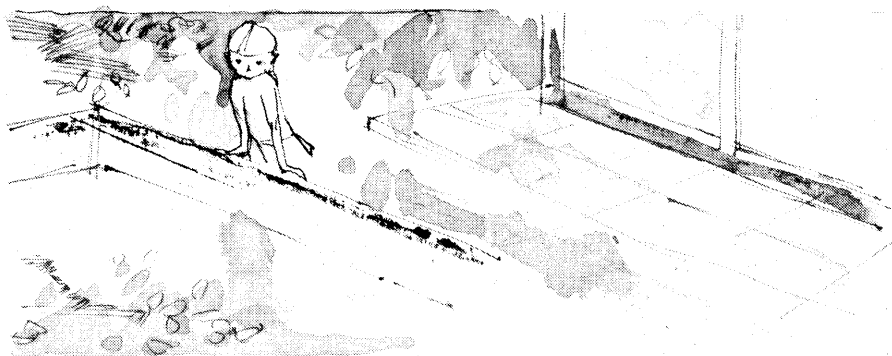
発行 **フレーベル館**

# 幼児の教育

第七十二卷 第七号

83753





# 幼児の教育 目次

——第七十二卷 七月号

表紙  
カット  
赤坂三好  
斎藤信也

これからの保育を考える……………児玉 省……………(4)

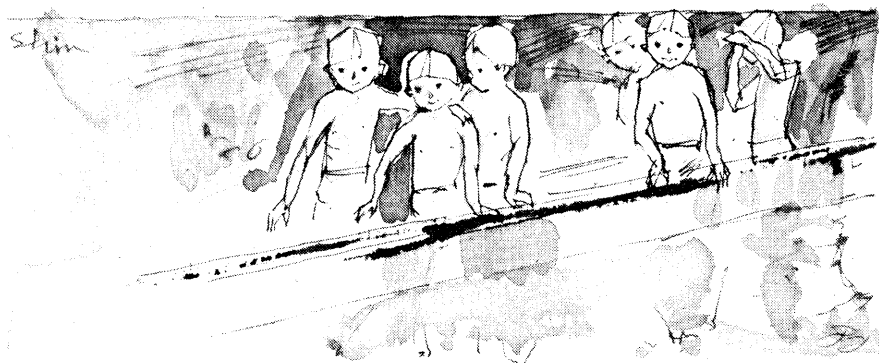
日本ザル幼児の保育ノートから……………浅見 千鶴子……………(9)

幼児教育の源流 (Ⅵ)……………猪岡 猛……………(17)

フレーベル……………猪岡 猛……………(17)

七夕祭……………黒板 伸夫……………(34)





つぶやき

想像上のキャラクターと子どもたさとの関係

山村きよ (38)  
室谷幸吉 (42)

私の保育

幼稚園の外から見た子どもと中から見た子ども

太田一枝 (47)  
永井康子 (51)

★調査報告

幼稚園児の教育費について(1)

井手達子 (55)  
金田和恵

馬場紀子  
横田京

幼児の観察研究

―活動の発展について―

移動動物園を迎えて

津守真 (63)  
野辺繁子 (70)

編集委員・勝部真長・村石京子

村田修子・本田和子

編集主任・津守真・赤間峰子

# これからの保育を考える

児 玉 省



経済成長、技術革新、人間とその発達に関する新しい科学的知見、社会事情の変化と新しい社会風潮の台頭などによって、あらゆる教育思想が問われているのが現状である。ことに幼児教育に関する考え方や実践は動揺が著しいものがあるようである。私たち保育に関係のある者は、この時にいかに考え、いかに対処すべきであろうか。これは私たちの誰もが考えなければならぬ問題である。この難問に多少なりとも私なりの自問自答をしようとするのが本文の目的である。

まず保育界の現状を見よう。保育というのをきわめて広い幼児教育の意味にとってみると、幼稚園、保育所のなかだけでなく、それを取りまく家庭や社会では、幼児に対する知育偏重の傾向が著しい。小学校の下うけ的な教科的教育を行なっている幼稚園や保育所はかなりある。ワークブックを使い、字や数等を教えている。他方小学校では、新入一年生が始めからある程度の漢字を知っていることを期待している。字や数を教えること

は、幼稚園や保育所の看板になっている向きもある。

一方これと対立するかのように、自由カリキュラムで、児童が自分らの思うように動き遊び回ることをもってその教育方針としているところもある。もちろん自由カリキュラムに対立するものとしてはシーケンス・カリキュラムがあり、保育雑誌から写したような整然としたカリキュラムでがんじがらめにしばっているところもある。

これらを支える根拠としては、ブレーベルに還れ！ ルツソーに還れ！ モンテッソーリの再発見！ ピアジェの発達理論、ソビエトの幼児心理学などが入り混じっている。さらに一昨年発表された中教審の答申は、さらにこのデイスカッションに拍車をかけたようである。いつの世にも対立はあり、対立があること自体は望ましい姿であろうが、自らの立場を持たない者は、時流に流され、または進路を見誤り、または見失う危険があるであろう。



紙数の関係で、端的に問題に入っていくと、いい保育とは何であるか？ 幼児の望ましい成長発達を守り促進するための取扱いと指導である。

望ましい発達とは何であるか？

1、子どもが一人の人間として最大限に発達し、自己を実現し、かつ社会生活を楽しみ、社会に貢献し得るようになることである。

2、将来のあり方を達成する手段として、途中の過程について、将来にだけもっぱら眼をつけばいいという考え方が相当根強いものであるようであるが、筆者はデューイのいうように、発達の過程の一こま一こまが、子どもにとって満足なものではなくてはならないと思う。その積み重ねこそが、将来の望ましさを真に確保するゆえんである。能力も人柄も、現在から将来へと、連続して変化成長していくものである。このことが忘れられていることが多い。

3、バランスのとれた発達こそ望ましい。一人前の人間としては、個性、自主性、獨創性が必要であるが、発達過程においても、その年齢なりのバランスがとれていることが望ましい。バランスは、子どもの精神的安定に連なるものであるし、またかつ、将来の望ましい発達を促進し約束するものであるからである。バランスのとれていない子どもについてはバランスを獲

得させることが必要である。

ここにはたくさん問題を含んでいるが、いくつかを拾ってみると、たとえば、本や積木ばかりで遊んで、友だちのない、体を使った遊びをしない子どもは、バランス欠如型であるが、こういう子どもは、子どもの生活を楽しむことも少ないし、性格的にもかたよるし、知的発達さえも阻害されることがある。筆者が藤田復生先生のお手伝いをして調べているゆかり文化幼稚園の卒園児の調査では、幼稚園時代に健康で、運動能力があり、社会性の発達していた子どもは、その後の追跡調査で少年期においてもよき発達を示し、知的能力さえも優秀になっていたものが多いことが示されている。幼稚園時に字が書けた読めただけということは、後年のよき発達——知的発達をふくめて——を保証していないのである。

前の箇条書きのなかでは、こともなげに人柄とか、性格とか社会性とかいったが、これこそは子どもの発達の土台になるものであって、子どもの将来のあり方と幸福を約束する最も重要なものではなからうか。

それではいかなる保育が望ましいであろうか？ 保育の方法は、百人百様で、それを十把一からげにとりあげることはできない。しかし、大要の問題点をディスカッスすることはできる

であろう。

まず、保育方法に自由保育と集団保育の問題がある。端的にいうと、現実では集団保育が多過ぎるのではないであろうか。

筆者は集団保育の価値を無視するものではない。たとえば、集団とともに行動し、その集団のきまりに承服し、集団における自分の役割を果たすことを学ぶことは、どの子どもも身につけなければならない訓練である。それは社会性の一面でさえある。しかし集団保育だけに頼っているのは、自主性や個性の伸長をばむ可能性がある。現にそういうものの欠けている子どもを随所に見ることができる。

自由遊びの中でこそ、はじめてよくつちかわれるものがある。今述べたような自分で考え自分でやりとげるという自主性と、他人とちがった考えや立場を持ちそれを主張し得る個性などの重要な性格面だけでなく、物事に真に没入してそれを楽しみ、また自分の新しい考え方ややり方を見いだす創造性もまた、しばしば自由遊戯の中に展開するものであることはよく知られていることである。

自由カリキュラムと、シーケンス・カリキュラムの問題もまた前述したことに連なることが多い。集団保育がシーケンス・カリキュラムに関係が多く、自由遊びは、自由カリキュラムに関連するところが多い。もちろん自由遊びと自由カリキュラム

とは同一物ではない。自由遊びは、シーケンス・カリキュラムの中で的一部分であっても、さし支えないからである。シーケンス・カリキュラムについても、筆者はそれを全面的に拒否するものではない。ただあまりにも、細かく規定し保育を進めることは、自由遊びの時間を減少させることのほか、かつ、もっと重要なことは、子ども自身から、自由な伸び伸びとした活動とふんい気を奪うことになることである。子どもは、がんじがらめからんだわくの中で生きることではなくて、自ら思うような活動にしたがい、工夫も独創性も、忍耐も努力も、その自由な活動の中——ほかの子どもといっしょになった——で伸びることこそ望ましいものと考ええる。社会性もこういう生活の中でこそ自然の発達を示すであろう。

この問題はルッソーの自然に還れの考えに導いていくことに気がつく。自然とは何か？ という問題はむずかしい問題であるが、与えられた保育環境だけにしばって考えると、保育者の干渉の手が加わらない状態において自己保育することではないであろうか。子どもどうしがお互いに、言いあったり、けんかしたり、助け合ったりするうちに、自然に対人関係を学び、また少々は石につまづいてけがをしたり、木に登ってすべったりしているあいだに運動能力や体力の発達を獲得する——こういった状態こそ子どもたちが保育的に伸びていくという考え方であ



ろう。これに対して訓練派は、保育者が子どものあるべき姿を想定して、それに積極的に子どもたちを近づけて行こうとするのである。この両者の対立はいつの世にもあることであって、永遠の課題であるかもしれない。

さて、保育とは何であるか？ 子どもの望ましい発達とは何であるか？ それを実現するための方法について、大まかながらいくつかの立場について考察を加えてきたが、最後にこれらの望ましい保育とは何であるか？ の課題に対する筆者の考えを述べることにしたい。

1、保育の目標は、子どもが心身ともに一人の人間として望ましい発達をするための指導である。

2、そしてその発達のありさまは、将来に目標をかかげて、途中の経過は考えないで目標に向かって保育することではない。たとえば将来えらくなるために勉強するのであって、途中の状態がどうであろうが、問題ではないといった、かつての考え方は、今もなおかなり行なわれているが、この考え方が、子どもの児童期を無味乾燥な灰色のものにし、子どもの豊かな情操や個性や独創性などを育てないで殺している。どこかにひそんでいるこういう考えこそ、危険なものである。子どもは、発達の各段階を楽しみながら、知的にも情操的にも社会的にも成

長すべきである。そう保育すべきである。

3、子どもの身心の、また各機能の発達のバランスを促進することが大切である。人間一人前になれば、各人職業ごとに能力も生活も専門化または特殊化してくるが、児童期のころから、子どもの発達をかたよらせてはいけない。かたよった発達は子どもの不適応にも連なるし、また望ましい発達の邪魔になるであろう。バランスは子どもの身体的発達促進のための必須条件である。知的発達にとってさえも、このバランスの上にこそ、望ましい知的発達が生まれるであろう。

4、現在の幼児は、平均的にいってその発達がいびつになっている傾向がある。運動能力は、戦前の食料不足の時代の子どもよりも劣っているし、日本保育学会の研究では一九五四年と一九六九年の幼児を各七千名以上調査したが、一九六九年の幼児は十五年前の子どもに比べて運動能力が落ちているし、社会性の発達もおくれている。保育というものが抽象的なものでなくて、現実の子どもを相手にしている以上は、これからの保育の一つの課題はこの子どもにおける発達のひずみを直すことではないかならない。また今の幼児には情報的にも反省すべき点がある。

5、世の中が複雑になるにつれ、また文化が進むにつれて、児童が身につけることを要求せられる知識や技術もまた増大す

ることは当然である。その意味において、筆者は児童の知的開発に反対するものではない。むしろ、この知的能力の伸長を望むものでもある。世界の各国もまたそういうことを考えているようである。ただしこれにはいくつかの大切な条件がある。

知的開発が、児童の他の心身的機能の発達に犠牲性において行なわれてはならない。知育偏重などこのバランスを無視した考え方である。知的開発を行なうとしたら、それは環境を豊かにし、子どもの生活と遊びを通じて、その知的能力が自ずと伸びるよう考える。かつ当然精神発達の原則にのっとること。このことは場合によると、健康で愉快に楽しく遊んで幼稚園で過ごすことにもなる可能性がある。

たとえば、幼児の知的発達はその知覚運動的知能から出発し、環境との接触、対人接触の間に促進せられていくこと——これはピアジェ的な理論。さらに最近のソビエトの研究では、幼児の記憶は、憶えようとした記憶よりも、憶えようとしなくて何かしている時に、憶えたものの方が、記憶として残りやすいという知見。幼児の言葉は行動に伴って発達するという知見。また遊戯こそ子どもの感情的安定や柔軟さ、工夫、発見を与える機会であるという知見、いずれも、知的発達を求めるとしても、ワークブックや暗記などによる方法が、むしろ非能率的であることを示すものである。大阪の、聖和女子大学での研究では、

幼稚園時に漢字を教えておいた組と、全然教えなかった組が、小学校に進学した時、一年生の終りには、両者間に字についての能力に差がなかったことを示している。国立国語研究所の研究でも、幼児で字をよく習得した子どもは、家で字を教えることをしなかった。ただし知的遊具——積木、絵本など——を与えていた家庭の子どもであって、字を教えこもうとした家庭の子どもの方が習得能力がおちていることを示している。

能力の働きの具合に適しない方法で物事を教えたり、生活の中で使いもしないような物事を教えても、たいして物にならないことを示すものである。いわんや知育偏重派の教育は、子どももの体力や人柄などの望ましい発達を阻害する結果になっていることが多いのを考えると、大きい誤りをおかしているといふべきであろう。

6、最後に——むやみな産業開発は公害を生んでいる。むやみな企業によるまたは個人の利潤追求は社会的利益に合致しないことが今ごろになってわかってきた。競争社会の中で競争だけを目標にした教育は、望ましい教育とは言えないではなからうか。筆者は経済的なことを問題にするのではないが、親の教育理念が競争意識を離脱して、自分の子と他の子どもたちとの共通の幸福を求め、共通の福祉を求める方向に向かうべきものと思う。保育はこういう方向づけを頭におくべきではなからうか。





# 日本ザル幼児の

## 保育ノートから

浅見千鶴子



バスケットの中

はじめに

私は日本ザル幼児の保育研究を始めて十年近くなる。毎年一頭か二頭の赤ん坊ザルを日本モンキーセンターその他から購入したり、貸与されたりして、彼らの母親代りとなって保育するのである。私の育てあげたサルたちを数えてみると十四、五頭にもなる。その中には事故でかわいそうなことに死んでしまったものも四、五頭あるが、元気に育っておとなになり、いいお母さんやお父さんになったものもある。これらのことどもについてはまたいつか語ってみたいが、ここではサルの赤ん坊の成長のすがたをたどってみることにする。

私の仕事は、いわゆる隔離飼育の一種であるが、隔離そのものの影響をみるのが目的ではなく、生まれて間もない赤ん坊がどのようにして「母親」を見いだしていくか、自分を保護し、養ってくれるものを確保していくことができるか、その過程のすがたや、メカニズムを見いだすこと、すなわち愛着行動(attachment behavior)と呼ばれる、幼い子どもに共通に現われる「親」なるものに対する反応行動の発達を研究するのが主な目的なのである。また、成長の

中に展開する仲間関係を追跡し、パーソナリティー形成の基本的なメカニズムも追究しようとした。この点に関してもいつか述べて見たいと思っている。

## 成長

生まれたてのサルの赤ん坊は、約四〇〇グラム位の大きさで、両手の中に入ってしまうくらいのかわいらしさである。眼が大きく、鼻も口も小さく、アゴが短くて逆おむすび型の顔をしている。最初は歯は生えていないが、生後四日ごろから下の前歯から生え出して、二カ月もすれば乳歯の全部が生え揃ってしまいうくらい速い。体は全体にうぶ毛につつまれている。うぶ毛はおおきくなってからの体毛の色とはちがって、内地系では灰白色、ヤク島系のは真黒なやわらかい毛をしていて、すぐに見分けがつく、これが二、三カ月ごろから次第に生え代ってきて、半年もすると茶かっ色のややかたく長い毛になってしまう。

生まれた当座は、四肢はまだ弱くてふつうに歩けないが、物をしっかりと握りしめることができる。何かにしがみついていると不安らしく、ひとりで放っておかれると、手足をバタバタさせてもがいて泣き叫ぶが、何か触れるとそ

れにしっかりと抱きついてしずまる。自然状態では生まれるとすぐに母親のお腹によじのぼって胸毛にしっかりとしがみついている。母親から無理に放すと、手足をバタバタさせて泣き叫ぶ。それでタオルなどをあてがってやるとやっとそれを握りしめ、安心して静かになるのである。赤ん坊の手は小さくて指にはうすい平爪がある。私が手をさしのべてやると抱きついてくるが、その握る力が強く、うすい爪がきつく腕の肌に食いこむので、傷だらけとなるのが常であつた。

母親の胸に抱きついてる赤ん坊は、顔を左右に動かして、乳首をさがし、口にふれるとそれに吸いついて乳をのむが、人工飼育の場合は哺乳ビンでミルクを与えなければならぬ。日本で最初にサルの赤ん坊の哺育をされた故川辺寿美子さんの苦心談によると、乳のみ人形用のオモチャの哺乳ビンの小さな乳首を見つけて、それを使ったということであるが、私の経験では人間の赤ちゃん用の普通の哺乳ビンの乳首で十分間に合った。体の大きさは人間の赤ちゃんと同様で大へん違ふけれども、サルの口の構造がちがうのであろうか、けっこう大きな乳首でも入れてよく吸うことができるのである。



ミルクのみ

空腹になると赤ん坊は顔を左右に振って、しきりにさかすような格好をはじめ。そこへ乳首を近づけてやると、それが口に触れるとすぐに吸いついて飲み出す。だいたい飲んでいるうちにトロンとした眠つきになり、眼を半ば閉じたまま飲みつづける。やがて満腹すると、乳首をはなして眠ってしまう。よく眠くなりかけると乳首をさがすように顔を左右に振り始める。乳首をあてがうと眠りながらミルクをよく飲んだ。一日の哺乳量ははじめ一〇〇ccぐらいから日に日に増していき、一カ月で一五〇cc、二カ月で二〇〇ccと目ざましく増え、体重も日ましに増加していった。

サル成長速度は人間の約四倍だといわれる。一カ月もすれば足もすっかりできてピョンピョンカエルとびのような歩き方でどこへでもいくようになる。棒や金網をよじのぼる動きは歩くよりも早くから現われる。どんどん高いところまで上るが、降りることはまだできず、よく助けを求めて泣き叫んだりしていた。

### 愛着行動

最初の二カ月ばかりの間は誰にでも抱かれ、誰からでもよくミルクを飲んだ。私は最初のうちはミルクを三、四時間おきには与えなければならぬので、竹バスケットの中にタオルを入れて、その中に赤ん坊を入れて外出するときは連れて歩いた。大学へも毎日そうして通勤した。電車の中へも持ち込み、時には信州の山小屋へ行くために中央線の特急アズサ号に乗せていったこともある。哺乳の時間で、バスケットから出して、用意してきたミルクを飲ませていると、まわりの乗客たちが珍しがって、近づいて愛撫してくれたりしたものである。このように、はじめのしばらくの間は、私からでも他の学生からでも平気でミルクを飲み、抱かれたり愛撫されたりして研究室のペットになっていた。



## 人見知り

そのように誰にでも遊んでもらっていたのに、三カ月ごろからようすが変わってくる。いわゆる「人見知り」が始まってくるのである。私以外の人が近づくと、恐ろしそうに鼻にしわをよせ歯をむき出し、恐れ表情をして「キッキッ」という恐れ声を出して泣き出す。ミルクも私以外の者が哺乳ビンをあてがっても飲もうとしなくなる。そして私のあとばかり追い出す。そばでひとりで遊んでいても、私が動きそうな気配がするとすぐとんできて抱きつく。ど



散歩

こへでもついてきて離れようとしないう。無理に放すと大きくわきして抵抗し、泣きわめく。このころからバスケットやケースの中に入れるのをひどくいやがるようになった。ケージの中に入れておくと、私の方ばかり眼で追っている。私がおの方へいこうとすると金切り声をあげて泣き叫ぶ。戻ってくるとビタリと泣きやむ。

「先生がいるときといないときとは全然ちがう」と学生たちが慨嘆していた。私自身にはわからないのだが、他の人たちにはサルのようなちがいがよくわかるらしい。私でないときも日も明けないというような一時期がある。

## 探索

見知らない場所に連れていくと、私にしっかりと抱きついていまま離れない。しだいに馴れてくると、少しずつ動き出す。抱きついていて手も放し、あたりのものをいじり出す。はじめはまわりだけを手のぼして探索しているが、だんだん遠いものもいたずらしくなってくる。はじめは後足の片方だけで私の服の端をつかんで体全体前へのぼしてあたりをいたずらしているが、少し遠いものをいじろうとしても、足が私から離れるとまたあわてて私のところこ



山荘で遊ぶ

走り帰って抱きつくのである。こんなことを繰返しながらしだいに私から離れて、見える範囲で遠いところまで出かけて遊ぶようになり、私以外の人にも好意を示して近いうとするようになってくる。

### 好奇心

サルは一面保守的といわれ、食べ物など新しい見馴れないものが与えられると、こわそうにつまんで、ちょっとにおいをかいでみるふうをしてポイと捨ててしまうことが多い。しかし、よく馴れた場所では、目新しいものが目に入

るといちはやくそれを拾い上げ、かいでみたり、口に入れたり出したり、かんでみたり、しゃぶったり、一通りの検査をしていじりまわす。薄い紙などはたちまちに破かれ、口に入れられクチャクチャにかみつぶされる。小さな粒のようなものが大好きで、床の上に落ちていると目ざとく見つけてすぐつまんで口に入れてしまう。画びょうのような尖ったものもかまわず口に入れて楽しむ。ときにはほお袋の中に大事にしまいこんで、外からポコッと物の形通りにふくらんでいるのがわかる。ときどき口から出して眺めて、また口にはおぼる。気に入ったものは大分長い間口に入れたり、手にもったりしているが、他においしいものをもらわなければなくなると、もうそれをポロッと口から落として、新しい方に気を乗りかえてしまうのである。私たちが鉛筆やボールペンをとり出すと、こんどはそれがほしくなると、手によじのぼってとろうとしたり、追いかけてわして大騒ぎをする。ひもなどを結ぼうとしているとき、サルの目にとまると大へんである。そのひもの端をさっそうく手や口で引張りまわし目茶々にされてしまう。何か食べようとするととんできてのぞきこみ口を近づけてはしがる。

夏の夜、蚊とり線香の煙が立ち上るのを見て、それをつかもうと手をのばして宙を一生懸命つかんでいた。また、きれいな花模様が画かれている絵を見て、それをつまもうと指を平らな面の上で滑らせて、苦心していたこともある。服のボタンが好きで、抱くと胸のボタンに吸いついたり、手でいじくったりする。眼と手と口の協応動作はかなりすぐれているようである。

### グルーミング

自然の母と子であると、母親ザルは子どもを抱いていて、暇さえあれば、子どもの体をグルーミングしている。両方の手を巧みに動かして、子どもの頭や顔や体のあらゆる場所の毛をすき分けて、何かついていると指でつまんで口に入れる。口をモグモグさせながら、しきりに子どもをグルーミングしてやっている光景はほほえましい。子どもは母親のなすがままになって仰向けになったり、片方の腕をあげてじっとしてグルーミングを受けている。グルーミングは、されるものしてやるのも一種のたのしみのようなものになっているらしい。はじめは赤ん坊は一方的に母親にされるだけであるが、半年ぐらいうると少しずつ自分の方から相

手にしかけるようになる。はじめはほんのお印ばかりで、すぐに他の活動に移ってしまいが、しだいに念入りに長い時間をかけてやるようになる。そのうち自分の体も自分でグルーミングするようになる。グルーミングを覚えると、誰かにしてやりたくてたまらなくなるらしい。私のサルたちは私の手をつかんで、毛がない裸の指を、しきりに口をモグモグさせながらグルーミングの手つきをした。手をパタパタとして毛を分ける格好をし、小さなホクロのようなものを見つけると、それをつみとろうとする。指でとれなければ口をつけて舌でなめとろうとする。そのうちにいつの間にか私の指から、自分の毛の生えている腕に毛分けが移って、またあわてて私の指をつかむのである。二頭を対にして育てているときは、かなり早くからお互いにグルーミングする姿がみられた。ひとりがグルーミングをしてやりたくなくて相手をつかまえると、その相手はまだ自分にしてもらいたくないというとき、すりぬけて逃げ出す。そうするとやりたい方は怒ってギャギャツとわめく。よく二匹でグルーミングをめぐってイサカイをやっていた。一方がやってもらうと、こんどは入れ代ってやる側になり、交互にやり合うことが発達する。

グルーミングは自然の毛皮の清掃手段であるが、人間の私はうまくサルや赤ん坊にしてやれない。その代りにお風呂を一杯いれて、その中に赤ん坊を抱いてつけてやる。何をされるか不安そうに、はじめは私の手にしがみついているが、お湯はあたたかくて気持ちがいらいしくおとなしくなっている。石けんをつけて一通り洗って流してやる。ここまでではいいのだが、お湯から上げて水をふいてやる段になると大へんである。タオルで体をこすられるのが恐いのか必死になってもがき、逃げ出そうとする。ぬれた毛皮は水をたくさん含んでいるので私も水でビショリ服をぬらされながら、タオルをもってサルを追いまわす。格闘の末やっと水気をふき上げるときれいになった毛がフックラとすがすがしい赤ん坊になる。その後しばらくの間彼らは私を警戒してよりつかない。ひどい目に合わされたと思うのであろう。

### すね行動

何か気に入らないとき、たとえば体を押えつけられ自由がとれないときなど、体をピクピクとバネ仕掛の人形のよ

うにけいれんさせる。そしてときにはガブッと手にかみついたりする。このような反応は生後間もないころからよく現われた。怒りの反応の一種であらう。しだいにこれが少なくなってくると、次に「すね行動」がでてくる。これは自分の思うようにならないとき、たとえば抱きつきたいのに、抱いてもらえないといううなとき、突然、ギャーッと大声で泣き出して、あたりを暴走し、部屋のすみなどに走っていつてうずくまって泣きわめく。こちらがおどろいてなだめたり、すかしたりしても、後ろをむいたきり動こうとしない。そしてチラ、チラとこちらを見てはまたそばをむいて泣き声をあげる。私もきげんをとるのをやめて知らん顔をしてはかへ行くふりをする、急にとんできて胸にとびこんで顔をうずめてシャクリ上げるようにして泣く、そして一しきり泣いてしまうとあとはまたケロリとして、いたずらをはじめてとびまわるのである。このすね行動はその後頻発し、ほしいものがなかなかもらえないとき、すぐギャーッと泣きわめいて手に入れることを覚えた。もらってしまうとケロッとしている。つまり手に入れる手段としておどかし泣きを始めたのである。四、五ヵ月になるとあまり泣かなくなる代りに、おどしの身振りや音声をす





るようになった。じつとこちらをにらんで口をあける。いまにもとびかかるようなふりをする。しっぱをピンとあげて向かってくる。気の弱い学生が小さな幼児のサルにこんな格好でおどかされて、逃げまわった。



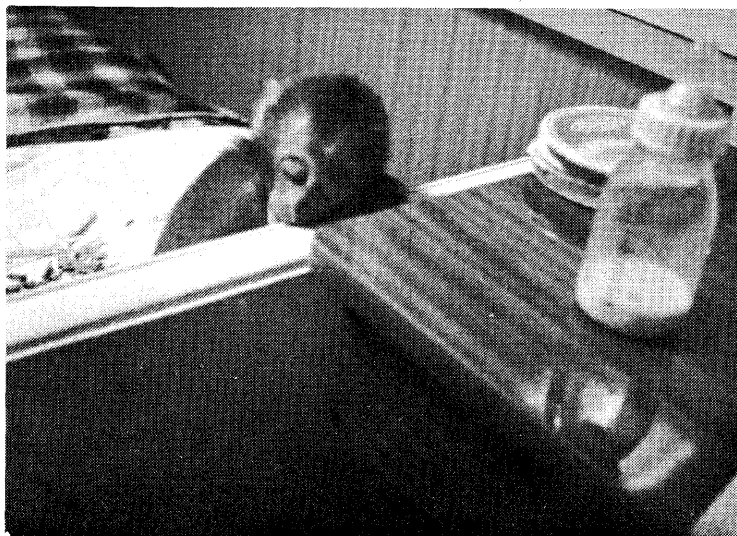
すね行動

書いていろいろなことが出てきてきりがない。サルは泣き声をあげるだけで、ヒトのようにコトバをいえないが、情緒や感情などはよく通じ合う。よろこびの声や悲しみの声はすぐ私にもききわけられる。しばらくぶりに会うと抱きついて離れない彼らに、親に似たよろこびを感じ

るのは私の醍醐味だいごであろうか。

(お茶の水女子大学)

いねむり



## 「幼児教育の源流」(VI)

### フ レ ー ベ ル

#### 〔一〕 その生涯

フレーベル (Friedrich Wilhelm August Frobell) は一七八二年ドイツのチューリンゲンの森の田舎村オーベルワイスバハに生まれた。

父は厳格な牧師であった。多くの教区に区分された約五千人の魂の救済を一手に引き受けていたことから、その活躍ぶりが想像される。彼には牧師の義務を決して忘れない厳しさがあった。また彼は田舎の牧師には珍しいほど教育のある人であり、また学者でもあれば経験家でもあった。このような父の態度は家庭においても同様であった。朝夕家族全員が集まっの礼拝が行なわれ、それによって家族は精神世界へと導かれ、

猪 岡 猛



心情生活は豊かになっていった。フレーベルが父から受けた宗教的感化は非常に大きなものであった。

母はフレーベルが生後わずか九カ月のときに病死した。いうまでもなく、この母の死は彼に大きな影響を与えた。

父はフレーベルが四歳のときに再婚した。当時のフレーベルは母の愛と両親の愛との欠除を身にしみて感じていたので、新しい母に対しては当然それを求めたのである。はじめのうちは彼の感情がこの新しい母に素直に受け入れられた。彼はすっかり幸福になり、のびのびと成長するかにみえた。しかし、この喜びと幸福も長くは続かなかったのである。というのは、間もなく新しい母は男児をもうけたからである。このころからフレーベルに対しての態度が変わってきた。母の愛はフレーベルか

らしだいにその男児に移っていった。そして、フレーベルに對してはことごとく叱責や非難が加えられ、やがて母との間には感情的に大きな亀裂ができてきたのである。

そのころからフレーベルはぼんやりとひとり室内から青空を眺めたり、教会の塔を見あげたりして、さびしく過すことが多くなつた。また彼の家は、他の建物や壁や生がきや、木のさくできちんと囲まれ、それから先は中庭や芝生や菜園で囲まれ、これを越えて出ていくことは固く禁じられていた。さらにこの屋敷は左右には建物、前方には大きな教会、後方には高い山の側面をのぞむ以外には何の見晴らしもなかった。したがって遠くの方を見渡すことはできなかった。彼はただ頭の上に、山地によくあり勝ちな晴朗な空を仰ぎ、周囲に清き新鮮な空気を感じるのみであつたのである。そこでは、嚴格と不自由と束縛のみが強く印象に残り、彼にとっては、愛に満ちた暖かい家庭の空気を味わうことはできなかったのである。

学齡期になつたフレーベルは、父の希望によつて女子小学校に入学した。その小学校はきわ立って清楚であり、また安静と優雅と秩序とが支配しており、これらのことがフレーベルの内面性の発達に大きな影響をおよぼしたのである。それは

彼にとつて一層高い精神生活への出発点ともいえるものであつた。しかし、家庭での生活は依然として孤独であつた。家庭にいながら家庭の味を味わい得ない状態であつた。

彼が十歳のとき、なき母の兄ホフマンが彼の家にきてしばらくの間滞在したことがあつた。このとき、ホフマンはフレーベルが逆境の中にいることを知り、父にフレーベルをひき取ることを申し出た。父は喜んでこの申し出を受け入れた。このようにして彼は伯父ホフマンの家へ引き取られたのである。

ホフマンの家は、フレーベルの家とは異なつて、落着きと平和があつた。「私の父の家には嚴格が、そしてここには温和と親切とが支配していた。あそこでは私は私に關して不信用をみたが、ここでは信用をみた。あそこでは私は束縛を感じ、ここでは私は自由を感じた。今までは自分と同じ年輩の少年の仲間に入ることはほとんどなかったが、ここでは実に四十人の学校友だちをみつけた。伯父は家続きの庭園をもつていて、そこに行くことを私は許されていた。のみならず、欠くことのできる規則であつた時間を堅く守つて帰宅さえすれば、その近くのどこに行くのも自由であつた」<sup>①</sup>のである。小学校も男子校にかわり快活な学校生活を送ることができた。特にそこで行なわれた伯父の説教を中心とする宗教教授の時間に彼の心はひきつ

けられた。彼はそこで精神生活を豊かにするための糧<sup>かて</sup>をじゅうぶんに取り入れたのである。

このようにしてフレーベルはホフマンのもとに四年間滞在したのであるが、この期間中に彼の生活は三つの方向をもっていたといわれている。すなわち、宗教的な啓発発展、子どもの遊戲に関すること、伯父の平和な家庭生活である。

さて、伯父の家における幸福な生活も、堅信礼で終止符をうった。十四歳の少年フレーベルは市民のひとりとして職業を決める必要に迫られた。本人の希望、父の忠告、母の提案などによって、一七九七年にウィックという林務官のもとに弟子入りした。ところがウィックは自分のもっている有能な知識を他人に教える術を知らず、また多忙のためにフレーベルを指導することができず、結局は彼自身の独学によって植物学、数学、語学などを学んだのである。二カ年の見習期間を終えて、彼はイエナ大学に入学した。そこでは応用数学、算術、代数幾何、鉱物学、博物学、物理、化学、財政学、林樹栽培、林業、建築学、測量術などの講義をきいた。当時のイエナ大学にはシラー、シェリング、ノヴァーリスなどがいて、ドイツ・ロマン派の中心地であった。ここで彼は内的な眼を開かれたのである。

在学二年目のときに彼は経済的理由によって大学をやめて父

のもとに帰った。しかし、一八〇二年に父が死亡し、その後は父の家を出て山林書記になったり、農業書記になったりする。その間に彼は将来の職業について考え、結局建築家になることにした。ところがたまたま友人の紹介で小学校長のグルーナーに会い、すすめられて同校の教師となった。彼はここで教師の使命の高さにうたれ、新しい世界を発見するにいたった。

一八〇五年、二十三歳のときに彼はイヴェルドンにペスタロッチを訪ねた。当時のペスタロッチはその教育法によって名声がとどろいていたが、フレーベルが教育事業に携わる初期において、ペスタロッチに出会ったことは、彼の将来を決定づけるのに大きな影響を与えたと考えられる。翌一八〇六年にフレーベルは、家庭教師をしていたホルツハウゼン家の三人の教え子とともに再びペスタロッチを訪ねている。そこでの彼の生活は内的にも外的にも喜びに満ちたものであり、多くの刺激を受けて感激的なものであった。

一八一一年、フレーベルは自らの学問研究への意欲を満たすためにゲッティンゲン大学に入学し、再び学生生活に入った。その後、鉱物学のワイス教授を慕って、一八一二年にベルリン大学に移った。同教授のもとに鉱物学、結晶学、物理学などを研究したほか、同大学の教授であったシュライエルマッヘルの

宗教哲学の講義にも耳を傾けた。ところが時あたかもナポレオンの侵入によってヨーロッパ全体が騒然となってきた。フレーベルの祖国ドイツも戦乱の中におかれた。彼は大学生活に別れを告げ、ドイツの自由のために義勇軍に参加するのである。

一八一四年、ナポレオンの失脚によってヨーロッパに平和が訪れると、義勇軍は解散された。フレーベルは同年八月、ウィス教授にのぞまれてベルリン大学の鉱物理学の助手となった。このころからフレーベルの興味と関心はしだいに人間の教育へと移っていった。人類発展の法則にしたがって人を教育することこそが、自分に課せられた使命であると考えようになった。

ちょうどそのころ、兄のクリストフが病兵の看護に当たっていて伝染病にかかり病死したが、そのあとに残った三人の子どもに關しての相談の手紙を受け取った。この時に彼の心は決まった。ウィス教授の引き止めにも応ぜず、兄の残した子どもたちの教育にうち込もうと決心したのである。その時のフレーベルはすべてを捨て、すべてを犠牲にして、人間教育へ帰って行きたくてたまらず、発展の法則にしたがって人間の本質に迫り、人間教育への仕事にすべてをうち込もうとしていた。そこで彼はベルリンでの地位を捨て、新しく教育事業を起こしたのである。

一八一六年十月、グリースハイムに「アルゲマイネン・ドイ

ツェン・エアーツィーウンクアンシュタルト（一般ドイツ教育所）」を開き、待望の教育活動の第二步を踏み出したのである。

生徒は兄クリストフの子三名、兄クリスチャンの子二名計五名、時にフレーベルは三十四歳であった。この教育所は翌年カイルハウに移され、いわゆるカイルハウ学園として発展していくのである。この年には、かつての義勇軍の時に友人となったミッテンドルフとランゲタールも参加し、着々と学園の基礎がつくられていった。校舎もできあがり、生徒たちもしだいにその数を増していった。一八一八年、三十六歳の時フレーベルはウィルヘルミネを夫人に迎えた。「一八一八年の九月、今やすでに大きくなって子どもや兄弟のふえた家庭のために、わたくしは主婦を迎えた。自然と児童とに対するわたくしと同じ愛と、教育と人間らしい生活の実現とに対するわたくしと同じ高い努力的な心とが、彼女をわたくしに結合させた。彼女はしばらく前から彼女の家に養女にしていた娘を助手として自分の考えでいっしょにつれてきた」<sup>②</sup>のである。ウィルヘルミネ夫人は、フレーベルの教育思想の発展の上に忘れることのできない功績を残したといわれている。カイルハウ学園は一時六十人を越す生徒でにぎわったが、学園に内紛が起こったり、周囲の誤解や政府の不当な干渉などのために、しだいに衰退の道をたどっていっ



た。

この間にフレーベルは一八二六年、四十五歳の時に不滅の書「メンシェンエアーツィーウンク」を刊行した。この「人間教育」こそは、カイルハウ学園で得た教育の真髄を示したものであり、フレーベルの教育思想全体を明らかにしたものである。

その後、マイニンゲン公の助手と援助とによって、領地ヘルバに国民教育所を建設しようとしたが、それも公の近臣たちの反対によって不成功に終わった。しかし、フレーベルは自らの教育目的達成への使命感に徹していた。したがって、その教育的使命を果たすための彼の種々の教育的努力は、たとえいかなるものに妨害されても、少しも動ずるところがなかった。

その後、スイスのワルテンゼーやウイルソーにおいても、フレーベルの進歩的な考え方が、保守的な旧教の僧侶や信者から迫害を受けたが、それらがかえってフレーベルを奮起せしめた。

一八三四年彼はブルクドルフにおいて補習学校（レーベン・ホートビルテュング）の協同設立者として活動している。そして「一八三六年は生命の革新を要求する」という論文を発表している。彼はこの論文において、教育による生命の革新を人々に求めた。しかも、当時まだあまり人々が注目していなかった幼児の教育の重要性を強調しようとしたのである。幼児教育を

考えようとする、女性の問題と家庭の問題を無視することはできないが、彼も、幼児教育の重要性を多くの女性と家庭に訴えて、その協力を求めなければならないと考えたのである。

一八三七年、五十六歳のフレーベルは「自己教授と自己教育とに導く直観教授の教育所」（アイネ・アンシュタルト・フィアー・アンシヤウウンクスウンタールリヒト・ツーム・ゼルプストウンタールリヒト・ウント・ツァー・ベレールンク）を創設した。ここで彼は幼児の創造活動を満たすための遊具として「恩物」（Gabe）を考案した。そしてその教育所を「児童生徒のための作業衝動をはぐくむための教育所」（アンシュタルト・ツァー・プレーゲ・テス・ベシエフティゲンクステウリーベス・フィアー・キント・ハイト・ウント・ユージェント）と改称した。そして、週刊雑誌を発行したりして、自分の考案した遊具や作業材料の紹介や、自らの教育理論を広く一般に広めようとしたが、文体の難解なことと無味乾燥なことなどが影響して反響が少なく、二年で廃刊になった。

一八三九年五月、フレーベルの最大の理解者であったウイルヘルミネ夫人が病に倒れてこの世を去るという悲運に見まわれている。彼女は身体的には弱い方であったが、精神はさとく、愛において内助の力となることができた。カイルハウ学園にお

いて、ウイルソーの学園において、またブルクドルフの学園において、子どもたちに尽くした彼女の功績は高く評価されるものであった。

夫人の死は彼に大きな衝撃を与えたが、彼は悲しみに沈んではかりはなかった。同年ブランケンブルグに「幼児教育指導者講習科」を設立し、六カ月ずつの講習を行なった。この講習は一八四四年まで続いたが、その講習生の実習の場として「遊戲および作業教育所」(シュピール・ウント・ベシエフティゲンクスアンシュタルト)を併設した。そしてこの教育所を一八四〇年に「幼稚園」(キンダーガルテン)と改称したのである。

その後フレーベルは、一般のドイツ婦人に呼びかけて基金を集め、「一般ドイツ幼稚園」を創設し、保母の養成を計画した。一八四〇年六月二十八日にその設立記念式典を行ない、彼はその必要性を一般に訴えるための演説をしている。こうして、この日が世界における幼稚園の創立記念日となり現在にいたっている。

すでに述べたように、フレーベルは幼児教育における母の重要性を強調したが、家庭の母を直接教育するために、一八四四年に『母の歌と愛撫の歌』(ムッター・ウント・コーゼルリダー)を発刊した。人間教育の出発点は母にあるという固い信

念のもとに、芸術的に描かれた母のための聖書ともいわれているものである。

一八五一年、彼はウイルヘルミネ夫人の亡きあと彼の片腕となって働いていた教え子のレヴィンと結婚した。しかし、その喜びもつかの間、同年八月プロイセン政府は幼稚園禁止令を全国に発布した。フレーベルは驚いて、禁止令は誤解のもとに発布されたものであるとして、その取り消しを求めた。また世論もフレーベルに味方したが、結局は彼の願いは聞き入れられなかった。

このような苦難のうちにあったフレーベルは、やがて病床につく身となり、ついに一八五二年六月二十一日、七十二歳の生涯を閉じたのである。その墓標はシュワイナに建てられ、墓石には「いざや、われらが子らに生きようではないか」(Kommt, Lasst und unsern Kindern leben!)とつらやれている。

## (二) 幼児観と教育

### (1) 神性

「すべてのものの中には、一つの永遠の法則が宿り、働きそ

して支配している。この法則は、外的なものすなわち自然にあつても、内的なものすなわち精神にあつても、またこの両者の統一すなわち生命にあつても、同様につねに明らかにあらわれている。……すべてのものを支配するこの法則の根底には永久に存在する統一者が存在する。……統一者とはすなわち『神』である。

すべてのものは神性すなわち神から出てきている。そして神性すなわち神によって制約されている。神の中に万物の唯一の基礎がある。

すべてのものは神性がそのうちに働いているということのみによって存在する。

このように、各事物に働いているこの神性がすべてのものの本質なのである」

以上はフレーベルの主著『人間教育』の冒頭であるが、ここに彼の教育学の真髓を見いだすことができる。すなわち、フレーベルにあつては、神が宇宙の本質であり、また統一の中心であり、この神によってすべてのものは生きた調和、生きた統一のもとに創造されているのであつて、すべてのものが神的統一に基礎をもっているのである。したがって、この万物を内的統一のもとにある有機体としてとらえる思想は、フレーベルの教

育理論の基礎をなすものである。

このような観点から人間をみると、われわれ各自の本質もまたうちに永遠の法則を秘めており、したがって、幼児のうちにも永遠の法則が宿っている。しかも、彼によるとその永遠の法則が神性なのであるから、フレーベルのいう幼児の本性は神性なのである。

ここでのいう神性とは、宗教的な意味での全知全能を意味するのではなく、また、単に児童のうちに静的に内在しているものでもない。それはたえず生成発展し、創造的に活動し、生命に満ち、生命を生み出すところの实在としての神性であり、具体性を帯びたものである。

教育の仕事はこの本性である神性を導き出すことにほかならないが、フレーベルによると「人間の本質を指して、もともと善でも不良でも悪でもないということは、すでに人性に対し、人間に対して、叛逆をなすことである。いわんや、人間は生まれながらにして不善であり、人性はもともと悪であるなどというにいたつては、一層の叛逆である」<sup>③</sup>のである。

幼児の本性を神性と断じ、それが何のさまたげもなく働くときは「その働きは必ず善であり、また善でなければならない」<sup>④</sup>とするフレーベルの幼児観は絶対的な楽観主義であるといえよ

う。

## (2) 自発性

教育上幼児の自発性ないしは自己活動を重視する傾向はフリーベルを最初とするものではない。ルソーやペスタロッチーもこれを強調したことは周知の事実である。しかし、フリーベルはこれを一層徹底して重視している。自発性とは、自己自身の内的な動機に基づき、自己の興味と自己の力とにささえられる活動をいうのである。

すでに述べたように、幼児の本性は神性であり、その神性は決して固定的なものではなく、それは発達してやまないものとしてとらえられている。「人間は、否、人間のうちなる人性は、外部的にあらわされたものとして見れば、決して、すでに完全にあらわれたる完結したるもの、すでに固定し確定したるものと見らるべきではなくて、むしろ、たえず生成進行し、発達し、永遠に活動し、そして永却無限の目標へ向かつて、発達と進歩の一段一段を進んでいくものと見られなければならない」<sup>⑤</sup>

生まれたばかりの子どもは、ちょうど親木から落ちてきた熟した実のようなものであり、生命を自己のうちにもっている成熟した種子のような発展的なものである。成長発展のエネルギー

ーを自己のうちに保持しているのである。

フリーベルは、幼児をあくまでも内部に自発性をもっているものとしてとらえていた。そして、それは幼児のうちに固定しているのではなく、内から外へと自らを発展させるものであり、自己成長をめざすものであった。

われわれは、動物や植物に対しては、それぞれの個々の内部において働いている法則にしたがつてりっぱに発育し、よく成長するものであるということを知っているから、それらのものが自然に発育するように場所と時間とを与える。また若い動物には休息を与えて、強制的に干渉することを避けなければ、そのよき発育と健全な発展がじゃまされることもよく知っている。しかし、人びとは自然の動植物と同じ法則にしたがっている人間に対しては、全く別の態度でのぞむのである。単に自然性を尊重しないということのみではなく、あたかも「子どもをろうか粘土の魂のように、人間の思うようにこねあげることができる」と思っている<sup>⑥</sup>のである。われわれの思うようにこねあげることができるということは、外界からの力が絶対的なものであり、幼児が自らの発達の自発性をもたないということになる。ろうか粘土はただわれわれの手で思うように変形できるというのみで、そこには何の主体性もみとめられないからである。

彼は子どもの自発性を徹底的に尊重したが、この考え方に基づいた指導を実践した。一八二五年、彼に好意をもっていなかった政府の視学官が、カイルハウ学園において次のように述べている。「精神の自己活動はこの教授の第一原則である。それゆえに、ここで実施される教授は、幼い精神を一種の金庫にし、その中に現在流通しているあらゆる貨幣をできるだけ早くから詰め込むような仕方ではなくて、徐々に、間断なく、漸進的に、つねに内面的に、すなわち人間精神の本性の中に見られる関連にしたがって、単純なものから複雑なものへ、具体的なものから抽象的なものへと、その教授が何らのトリックもなく、着実に進行し、児童とその要求にきわめてよく適合しているので、児童は遊戯をするのと同じようにたやすく学習を進めている」<sup>⑦</sup>したがって、彼によると、人間の教育とは「自覚力、思考力、さらに理解力をもつ本質としての人間を、意識と自己決定をもつて、内的法則すなわち神性の純粹完全な表現へと励まし、指導し、そしてその表現の方法と手段とを指示すること」<sup>⑧</sup>であった。

世の多くの人びとが幼児を研究する場合に、彼らは幼児そのものを研究するよりも、幼児にいつどのように何を教えるかということを学ぶためであるのがつねであるが、フレーベルは幼

児そのものの自己発展を助けるために幼児を研究した。したがって、教授法の研究ではなく、学習法の研究に着眼したのである。このように彼は、子どもの活動的創造的な自己活動をきわめて重くみたものである。

### (3) 連続発展性

フレーベルによると、人間の発達段階にはそれぞれの発達段階に固有な精神や心情や身体への要求がある。「人間が一定の年齢に達することによって少年が少年になるのでもなければ、青年が青年になるのでもなく、その精神、心情、身体への要求に忠実に幼年期、少年期を生活することによってのみ、はじめて少年が少年になり、青年が青年になるのである。同じように、大人が大人の年齢に達したから大人になるのではなく、ただ彼の幼年時代、少年時代、青年時代の要求が彼によって忠実に満たされていることによってのみ、はじめて人間が大人になるのである」<sup>⑨</sup>

われわれはともすると、ただ単に外的に一定の年齢に達すると、以前の段階から抜け出たものとして、また全く別の新しい段階に属するものとしてとり扱おうとする傾向がある。このようにとり扱い方は、人間をその心情とは無関係に全く外的に形



式的にとり扱うものであり、個々の人間がある一つの点から連続的に発展するのを妨害するものといわなければならない。

周知のように、ルソー以前の時代には、一般に子どもは大人の縮図と考えられていた。大人を望遠鏡を逆にして見たものを子どもと考えていた。したがって、子どもは大人の域に達するまでは、きわめて価値の低いものと考えられていた。そこでは、教育は子どもの現在を犠牲にして未来にそなえたのである。ところがルソーは、子どもを「小型の大人」とみることをやめて、子どもの生活を、それぞれの時期に応じてじゅうぶんに生かすことを主張した。そして、この主張を一層おし進めたのがフレーベルであった。彼は人間の生命の発展は出生と同時に始まり、その後それは連続的に進行するものと考えた。

フレーベルによると、大人の本質はすでに幼児のうちに認められ、また人間の未来のすべての萌芽は幼児のうちに秘められているのである。そして、この未来への萌芽をのばす努力が教育なのであるが、そのためにはその時期を考えなければならぬ。すなわち、各段階に応じてそれぞれに内的な要求があり、その要求を満足するような努力を続けるのが最もよく、要求する以外のものを与えようとするのはむしろ有害なのである。したがって、それぞれの段階の要求するところのものを、彼が忠実

に、じゅうぶんに生き抜くことによってのみはじめて少年が少年になり、大人が大人になるのである。フレーベルはこの点に關して「他の關係においては深い理解をもち有能な両親が、幼児に對してはすでに少年や青年のするような行為をさせようと要求したり、そののみならず、幼児がすでに成年者にも似て、そのすることなすことすべてが大人のものであり、そして少年期や青年期を一躍乗り越えるようになることさえ要求することがある」と指摘しているのである。

元來、人間の本性は人間の内部において固定し、静止しているものではなく、つねに進展する生成物として、發展物として、一段階より次の段階へと創造的に進み行くものでなければならぬ。したがって、靜的なものではなく、人間の本性は動的なものとしてはあくされなければならないのである。

このように、人間はそれぞれの時期において、各時期特有の生活を得させるようにすることがたいせつなのであり、いたずらに外的に基準をもうけて、人間の發展をその基準に合わせようとする態度は、人間の内的なものの發育を妨げるのみでなく、のびようとする萌芽をもつみとる結果になるのである。

### 〔三〕 幼児教育の方法原理

フレーベル教育学の中心課題は、すでに述べたように、自発性を持ち、連続的に発展しようとする創造的な存在である子ども創造力を、どのようにのびし、育成するかということにある。すなわち、どのような教育の方法によって、ひとりひとりの子どものもつ創造力を教化し、育成するかということが第一の課題である。

彼は教育の方法の根本を子どもの活動に求めた、子どもの自然な活動こそが、子どもの生命そのものであり、また生活の自己発展なのである。子どもの活動は、具体的には遊戯と作業とにわけることができる。

#### (1) 遊戯

フレーベルは、まず幼児を遊ばせながら指導すること、楽しませながら、「創造的衝動」(ビルドゥンクストリップ)を発展させることに努力した。遊ぶこと、または遊戯は、この期における人間の発達、すなわち児童生活の最高の段階である。なぜかという、遊戯(シューピル)というドイツ語は、すでにその言葉が示すように、児童が自己の内面を自ら自由に表現した

もの、自己の内面的本質の必要と要求とに応じて内面を外面に表現したものであるからである。遊戯はこの時期の児童の最も純粹な精神的生産であり、同時にまた人間生活全体の模範ともいふべきものである。あるいはさらに、人間およびすべての事物の内奥に秘められたる自然的生活の模範でもある。それゆえに遊戯はそれ自身喜びであり、自由であり、満足であり、また平静であり、さらにまた外界との平和であり、みる人にもこれらの感じを与えるものである。また遊戯はすべての善なるものでてくる源泉である。それであるから、身体の疲れるまでもうまずに落着いて自らよく遊ぶような児童は、成長ののちに必ずや犠牲的に他人の安寧や幸福をはかり、ひいては、わが身の幸福をも増進するような、落着いた根気強い有為な人間となるであろう。

児童が熱心に遊びに没頭し、じゅうぶんに遊んで、その後疲れてよく眠っているようすは、この時期における児童生活の最も美しい現象ではないだろうか<sup>⑪</sup>

このように、フレーベルは幼児教育における遊戯の価値を非常に高いものとし、その意義はきわめて深いものがあると考えたが、その要点は、遊戯による内から外への表現性と遊戯における生活活動との同一性であろう。内から外への表現性につい

ては、幼児の遊戯においてこそ人間の最も純粋な素質や、最も内なる精神が発揮されるのである。幼児の遊戯は、そのなかに将来の内的生活の芽を藏しており、全生涯に向かつてのびようとする双葉のようなものである。遊戯は内に秘めている心情を發展させることによって、精神の陶冶や内的感覚の覚醒をうながすのである。また、生活活動との同一性については、彼は遊戯のなかに幼児の生活全体をみたのである。遊戯を教育的手段とするのみではなく、遊戯即生活と考えたのである。

したがって、遊戯によっていかに教育されるかというよりは、遊戯において幼児がいかに生きるかということが重要なのである。すなわち、「フレーベルは真によく遊戯する児童において、真に調和的な、真に絶対的な、人間そのものの真の生活をみつけたのである。遊ぶことしかできない幼児において遊戯が許容され、いわんや利用せらるべきだとしたのではない。遊びの生活に人間を見つけ、人間教育の本質的方法があると信じたのである」<sup>⑫</sup>

前節で述べたように、幼児は自己活動し、しかもそれが連続發展するものである。したがって、その発達に対応して遊戯の内容も發展するものでなければならない。その基本的な原則は「単純なものから複雑なものへ」ということである。まず遊戯

の内容は最も簡単なものからはじまり、しだいに複雑なものへと發展するのがよい。幼児に与える遊具は、したがって複雑に考案されたものではなく、簡単なものが適當である。幼児の発達段階に応じた遊具を与えると、彼らは自らそれらのなかに知覚知識の根源となるものを見いだし、これによって自己の内部を表現し、考え、構成してやまないのである。

## (2) 労作

フレーベルによると、物と心とはその本質においては同一であるから、身体的動作をなすことはやがて精神の本質を啓発することになる。「精神を働かせられること、およびその間に立ちあらわれるところの外部的、否むしろ身体的の作業、外部につくり出される仕事や生産に対する活動は、単に身体を強めるばかりではなく、また精神をも強め、精神活動の種々なる方向を發展させることがきわめて著しいものであって、それがために精神に気持ちのよい『労作浴』(アルバイテウスバートゥ)をすませた後、再び新たな力と生命とをもって知力的仕事にとりかかるのである」<sup>⑬</sup>

いうまでもなく、労作はそれによって得られる生産物や報酬のためや、それによって養われる技能のためではなく、労作そ

のものが即人生なのである。「人間の精神は、形態も構造もない混とん界に浮かび出て、形態と構造、また精神それ自らの本質と生命とを有するものを生ずるように働かなくてはならない。

これがわれわれが真の意味において、また特徴を認めて呼ぶところの労働と勤勞、仕事と創造との高い意味であり、深い価値であり、大いなる目的である。われわれが仕事によって内的なものを外部に表現し、精神に形態を与え、永遠なるものすなわち精神的生命に外部的な有限な、そして現実の姿を与えるという明瞭な思想なり、おぼろげな觀念なり、ないしは直接的な生き生きとした感情なりをともしなう勤勉と勤勞、仕事と行動とによってわれわれは真に神のようになるのである」<sup>⑭</sup>

すなわち、自然はすべて神のあらわれであり、人間もその例外ではなく、神の創造になるものである。フレーベルのいう神とは、一切を包括し、一切を維持し、またそれは創造的な存在であって、一瞬たりとも無活動の静止状態にとどまることはできない。神は連続的に創造し、たえず働きつづけるのである。このように神の創造になる人間も、当然神のように創造的に働きつづけなければならない。そして混とん界に生じた人間の精神は、その内的なものに外形を与えるように、また構造と形態とを与えるように働かなければならない。ここに労作とか勤勞、

あるいは仕事の重要性があるのである。

### (3) 恩物

すでに述べたように、フレーベルは幼児の創造的な自己活動を教育の中核とし、遊戯と労作とによって、幼児の内的なエネルギーを外部に表現し、自己活動の力を発展せしめようとした。したがって、そこではいかなるものをどのようにして幼児に教えるかということよりは、いかなるものを通して幼児自身に学ばせるかということが重要になってくる。そこでフレーベルは、幼児が自ら創造的に学習できる遊具を考案したのである。それが「恩物」(ガーベ)である。

恩物を考案したフレーベルの基本的な精神は、すべての幼児のもつ創造的衝動を健全に育てようとしたものであり、それによって、ますます幼児自身の創造力を向上させようとしたのであった。また、幼児のもつ創造的衝動のあらわれは、決して統一されたものではなく、多様性に富んでいることから、その遊具も、そこからそれぞれの創造的衝動によって何かを作り出せるような創造的要素を多くもっていなければならない。さらにそれは、幼児に何かを創造させるためのものであるから、既製品や完成品ではなく、基本的な形のもので単純なもの、しかも

そのうちに多様性に応じ得るような基本的な諸要素を含んでい  
るものと考えたのである。

このような立場から、フレーベルの創案になる恩物は、すべ  
て幾何学的な形態からできあがっている。その主たるものは次  
の通りである。

第一恩物 毛糸のボール六こ（六色）

第二恩物 木製の球、円柱、立方体

第三恩物 木製の八この立方体

第四恩物 木製の八この長方体

第五恩物 木製の二十一この立方体、十八この三角柱

第六恩物 木製の十八この長方体、十二この立方体、六この

#### 柱型

フレーベルはこれらの恩物に、それぞれ哲学的な深い意味づ  
けをしているが、ここではその基本的な考え方について述べる  
ことにする。

第一恩物は球であるが、彼によると球こそはすべてのものは  
はじまりであり、また最後の形でもある。それはあらゆる形態  
の中で最も初歩的なものであり、また最も基本的なものなので  
ある。幼児は球遊びを通して、球を周囲のものに置きかえて遊  
ぶことによって、自らの生活範囲の拡大をはかることができる

のである。

第二恩物の球、円柱、立方体は、幼児の場合には第一恩物の  
ボールと同じくらいの大きさのものが適当である。円柱や立方  
体はボールとちがって辺や角がある。それにボールとちがって、  
確実に静止することができる。ボールでは表現されない諸要素  
が表現されるので、幼児は球と比較しながらそれらの諸要素を  
会得していくのである。

第三恩物は、一つの立方体を八この同じ大きさの立方体に分  
割したものである。幼児はこの立方体から、全体と部分との関  
係について知ることができる。八この一つ一つは全体の一部分  
であり、また一つ一つはそれだけで、一つのまとまりのある全  
体を形成していることを理解する。また同じものが八こあるこ  
とによって、立方体を確実に自分のものにすることができる。  
この遊具は、つねに八を一組として幼児に渡すのがよい。そ  
して、それぞれの幼児に応じて適切な示唆を与え、幼児ひとり  
ひとりが工夫し創造し、表現するようにするのがよいのである。  
第四恩物は、一つの立方体を八この同じ大きさの長方形、す  
なわち「れんが型」に分割したものであり、基本的には第三恩  
物と同じものといえよう。しかし、分割のし方が異なるので、  
それを使って何かを表現する場合に一層変化に富んだ表現が可

能である。年齢がすすんでくると、第三恩物と同時に与えら

よい。形態を比較したり、多様な表現力を身につけることにより、幼児の心情は一層豊かになることが期待される。また、使用後の整頓も確実にできるような訓練をすることがのぞましい。

第五恩物は、第三恩物の発展したものである。立方体の数が多くなり、三角形のものが加わったことによって、一層多様な表現が可能である。幼児の年齢と発達段階にに応じて、それぞれの生活形式や認識形式、美的形式など多くのものを表現することができ。その多様性から考えて、五歳以上の幼児に適切であろう。

第六恩物は、第四恩物の発展したものである。これはその数の上からみても最高のもので、形式も最も変化に富んだものである。第一から第五までの恩物のどれよりも多様な表現が可能であり、より複雑な形式が生まれ得るものである。これを集団で使うことによって、集団生活や社会生活に必要なことがらを身につけさせることも可能であろう。また、第五恩物と合わせて使用させるのもよいと思う。

#### (四) 現代的意義

フレーベルの幼児教育思想の諸原理は一般に次のようなもの

である。

(一)、幼児は自発性に富み、創造的活動的な生命の持ち主である。したがって、彼らの創造活動や表現活動、それに自発活動などをそれぞれの幼児に適した方法によって、じゅうぶんにのばすための援助と環境条件の整備こそが、幼児教育上の主要な課題である。

(二)、幼児を含めてすべての子どもは、自らの興味を土台にして、楽しみながら、しかも日常の生活を通して必要なものを学習していくように指導されなければならない。

(三)、幼児はもともと社会的な存在であるから、遊戯や作業などを通して、協力する態度や助け合う姿勢などが集団生活に必要な社会性の発展を目ざした指導がなされなければならない。

四、幼児の心情を豊かなものにするために、情操面への教育的配慮が必要である。美的に、道徳的に、そして宗教的にのぞましい環境づくりにつとめなければならない。また、デュイイはフレーベルの教育原理として、次のようなものをあげている。<sup>15)</sup>

① 学校の第一の仕事は、協力的、相互扶助的な生活の仕方について児童を訓練し、かれらの中に相互依存の意識を養い育て、かれらを実際に助けてこの精神を明白な行為として実行させるような調整をなさしめることであること。

② すべての教育活動の第一の根源は、児童の諸々の本能的、衝動的な態度および活動に存するのであって、他人の観念を借りるにせよ、あるいは本人の感覚に訴えるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し、適用することに存するのではないということ。したがってまた児童の数かぎりなき自発的活動すなわち遊戯、競技、物真似、さては幼児の一見無意味な動作——在来はつまらぬもの、無用なものとして無視されるか、あるいは積極的に邪悪なものとして難ぜられさえした現象——は、これを教育的に用いることができる、否、教育的方法の礎石であるということ。

③ これらの個人的な傾向ならびに活動は、さきに述べた協力的な生活の仕方を維持する上に用いられることを通じて組織され、指導されるものであるが、それはこれらの傾向や活動を利用して、児童が最後にはそのなかに入るところのより大なる、より成熟した社会の典型的な営為および仕事を児童の程度に応じて再現することを意味するのである。そしてまた、児童は生産と創造的な仕事を通じて価値ある知識を獲得し、確保するものであること。

このようなフレーベルの幼児教育ないしは教育全般にわたる思想は、後の教育界に多大の影響をおよぼした。彼の思想をも

とにした幼稚園は、やがて、マールレンホルツ・ビューロー夫人らの力によって、イギリス・フランス・スイス・オランダ・ロシアなどヨーロッパ各地に広く紹介されて各国の採用するところとなった。さらにそれは、エリザベス・ピーボディ女史らの手によってアメリカにわたり、この自由の天地において、見事に普及発展していったのである。ここでは、かつて学校教育全体の外におかれていた幼稚園が、子どもの教育の全体計画の中に位置づけられ、小学校と密接な関連をもった幼稚園として組織されていったのである。

フレーベルの教育思想には、たしかにある種の神秘主義的な、あるいは象徴主義的な傾向がある。それは彼の名著『人間教育』からも読みとれる。しかし、それにもかかわらず、彼の教育原理は現代の最も重要な教育のあり方と同じ広がりをもっている。幼児の自発性や自然的興味の徹底した重視は、指導の際の教材の選択や教育課程の編成上、きわめて現代的な意味をもつものといわなければならないし、また、社会性の養成の必要性は、現代民主主義社会の成員には基本的に要請されるものであり、その現代的意味も決して小さいものではない。さらに、すべての教授が直接的な活動によって、具体的な生活を通して行なわれる、ということは、特に幼児教育においては、その重要性はい



かに強調しても強調しすぎることはあるまい。

このように、フレーベルの教育思想は、教育史家モンローも指摘しているように、<sup>⑬</sup>現代の哲学的、心理学的、科学的な思想と一致するのである。特に子どもひとりひとりの個性を尊重する現代民主主義社会においては、フレーベルの主張した教育思想の意義はきわめて大きい。われわれは、現在わが国の幼児教育が当面している多くの問題の解決のために、今一度フレーベルに立ち還って謙虚にその主張に耳を傾ける必要があるのではなからうか。

(大阪教育大学)

## 注

- ① 長田新『フレーベル自伝』岩波書店昭和十二年 二十八ページ
- ② 同右、二五七ページ
- ③ フレーベル(小原国芳訳)『人の教育』玉川大学出版部 昭和二十九年 一四〇ページ
- ④ 同右、七ページ ⑤ 同上、十九ページ
- ⑥ 同右、八ページ
- ⑦ P、モンロー(川崎源訳)『教育史概説』理想社 昭和三十二年 二一〇ページ

⑧ フレーベル 前掲書 二ページ

⑨ ⑩ 同右、三十四ページ ⑪ 同上、五十八ページ

⑫ 倉橋惣三『フレーベル』岩波書店 昭和二年 七十ページ

⑬ 『フレーベル』前掲書 一三九ページ

⑭ 同右、三十八ページ

⑮ デュイイ(宮原誠一訳)『学校と社会』春秋社 昭和三十六年

八八ページ

⑯ P、モンロー 前掲書 二一八ページ

## 参考文献

- 小川正行 『フレーベルの生涯及思想』目黒書店 昭和七年
- 莊司雅子 『フレーベルの教育学』フレーベル館 昭和二十五年
- 莊司雅子 『フレーベル研究』講談社 昭和二十八年
- 莊司雅子 『フレーベル』牧書店 昭和三十二年
- 莊司雅子 (編) 『現代幼児教育原理』亜紀書房 昭和四十四年
- マールンホルツ、ビューロー(伊藤忠好訳) 『教育の原点』回想のフレーベル』黎明書房 昭和四十七年

# 七夕祭

七月七日の「たなばた」は、牽牛、織女の二星をまつる行事です。現在の暦では夏の盛りに近いころですが、もともと旧暦によったもので、秋の立ちはじめの時期でした。

牽牛星は彦星ともよばれ「わし座」の星、織女星は「琴座」の星で、天の川をはさんで輝いています。

古代の人々は、日、月や星の運行と、人生の間に深いつながりを信じており、また多くの神話や伝説がつくられていることは皆さんもご承知のことと思います。

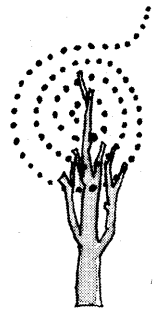
古い中国の伝説では、織女は天帝のむすめで、天の川の東に住み、機織り（はたおり）に精を出していましたが、天帝は彼女のひとり暮らしをあわれんで、天の川の西に住む牽牛のところに嫁入りさせました。ところが結婚すると織女はすっかり機織りの仕事をやめてしまったので、怒った天帝は彼女をもとの場所に戻らせ、一年に一度しか牽牛に会うのをゆるさないことにし

ました。七月七日がその二星が会うのを許された日で、この時、鵲（かささぎ）が天の川の上につばさをひろげ、かけ橋の役をしてやるという伝説もあります。

前に述べたように、星の運行は人の世の事に密接に関わっていると信じられていましたから、結婚などの重要な事柄には、とくに星の位置が気にされていました。したがって、このような星の結婚の物語がつくられるのも自然のことだったと思われます。

一年に一度だけの男女星の会合という物語は、感じやすい古代人のロマンティックな夢を、どんなにかきたてたことでしょう。地上の数々の恋人たち、ことにたやすく望みのとげられぬ恋人たちは、自分たちの悲しみや喜びを、この二星のおもいに託したことと思います。そして、恋のとげられるように二星に祈ったのです。しかし人々が祈ったのは、恋のことだけではな

黒板伸夫



く、織女に機織りの上達を願ひ、さらにいろいろな技芸の上達を願うのでした。むしろそのことが「たなばた祭り」の中心的な行事になりました。

わが国でこの日を古くは「なぬかの夜」とよびましたが、のちに「たなばた」というようになったのは、織女を「棚機つ女（たなばたつめ）」とよんだことから来ています。そして「七夕」という字に「たなばた」というよみを当てるようになったのです。

この祭のものは中国ですが、早くから日本に入り、日本的な季節感や風土とよく融合して行きました。

日本でも奈良時代より前に、すでに七月七日が朝廷の節会（せちえ）として行事が行なわれていました。そして、この日に相撲（すまい）が行なわれたり、虫干しをしたりしたようです。

そして、その中でしだいに重要なものとなって行ったのが、織女に技芸の上達を祈る「乞巧奠（きこうでん）」なのです。中国で行なわれたように五色の糸をさおの先につけて立て、瓜など、いろいろの供えものをして星をまつり、その時に女の人は月に向かって針に糸を通すことを試みたり、あるいは供えものの瓜に蜘蛛が巣をかけるかどうかによって上達の願いがかなうかどうかうらなうなどの風習も日本に伝わっています。蜘蛛の糸のう

らないには、小さな蜘蛛をふた物に入れ、翌朝その中につくられた巣の出来具合をみるというのもあったようで、これらのならわしは、「織女（たなばた）」はそらに知るらんさきがに（くも、のこと）の糸かくばかり祭る心を」という和歌によっても察せられます。

日本ではまた古くからこの日に朝廷で文人を召し、七夕の詩をつくらせることが行なわれましたが、このような時につくられた詩をはじめ、七夕のことを詠じた詩や和歌が多くあります。

平安時代、朝廷でのこの祭りの供え物のしつらえをみますと、清涼殿の東庭に長むしろを敷き、その上に朱塗りの高机を四脚置き、まわりに黒塗りの灯台を九本立て火をともします。北側の机二つには、瓜をはじめ果物、豆、干魚などを置き、南側の机二つには、針、糸、香炉、鏡など、それに中央に両方の机にさしわたして琴を置きます。

そして二星の会合をながめ、時には詩の会、音楽などが行なわれました。上達を願うことは、機織りや、裁縫だけでなく、音楽や、書道、文学などにわたっているのです。織女星は、ギリシャ神話のミューズの役割をしているわけです。

さて二星の会合をみるということは、平安時代に盛んに行なわれました。星合（ほしあい）ともいい、物語などにも出て来

ます。人々はこの夜の空が晴れることを望んだことでしよう。ここに一つ、興味ある出来事をご紹介しますよう。

長和四年（一〇一五年）の七夕の翌日、若い公達（きんたち）の左衛門督藤原教通（さえもんのかみ、ふじわらののりみち）は父の道長にこう話しました。

「ゆうべ私は二星の会合をたしかに見ました。どんなありさまだったかと申しますと、二星が両方からだんだんに近よって、その間が三丈ばかりになりますと、小さな星が両方から出て来て大星のところに行き、それが帰ったのち、二星は飛ぶように近づいて会合しましたが、その後、雲におおわれてしまったのです。」

父の道長はいうまでもなく、あの栄華をきわめ、望月（もちづき）のかけたることなし……と歌った人物ですが、この話は彼の日記、『御堂関白記』に書かれています。彼は、「昔の人がこれを見たということは伝わっているが、近來は全く聞いたことはない。感銘深いことだ。」とのちに書いています。

牽牛星も織女星も恒星で、実際に近寄ることなど全くないわけです。この話は、教通の幻想なのか、幻覚なのか、あるいはたまたまこの方角に流星でもあったのか、なぞというほかはありません。

ともかく、朝廷をはじめ、平安時代の貴族の七夕の祭はほぼこのようなものであったわけですが、平家物語には、梶の葉に思うことを書いて願うことなどがみえています。

さて、この日には古くから節供（せつく）として、索餅（さくべい）が用いられました。朝廷では内膳司が調進して天皇の朝餉（あさがれい）にたてまつりましたが、索餅というのは「むぎなわ」ともいい、小麦と米の粉をねり、細長くねじった菓子ということで、中国の伝説に、高辛氏（こうしんし）神話の中の帝王（ていおう）の子がおさなくして死んで一本足の惡鬼となり、人々を癡病（おこりのやまい）にするので、この子が生前に好んだ麦の餅を供え、それを人々も食べて病を除けたということになります。後の時代では、索麵（そうめん）を食べるようになりました。

時代が下り、また民間ではそれぞれおむきをかえて行き、たとえば供え物や、その時作る和歌の数などに、「七」の数を用いたりするなど、いかにも形式的なことも重ねられるようになりましたが、平安時代に形造られた王朝的な優雅なおもかげは伝えられ、いまも行なわれる竹に文字や和歌などを書いた短冊をつける風習などにしても、私たちを昔の夢にさそいます。

ここでちょっと考えなければならぬのは、七夕は牽牛、織

女の二星会合を祭ることから出発していながら、どうも織女が中心となり、牽牛、すなわち彦星氏の方は影がうすいことです。古くから牽牛も農作の神として考えられ、全く無視されてはいなかったようですが、どうもあまりぱっとしません。

ところが江戸時代の書物に、地方によつては七夕の前日の六日の夜、人々が野辺に出て火をもやし、遊びたわむれたりする風習があり、これは牽牛星を祭り耕牛の無事を祈るのだと記しています。

六日の夜から行事を行なうことも、かなり古くから例がみられますが、その日に牽牛の祭りをするというのは、いかにも農村らしい風景だと思えます。

このほか地方にはそれぞれ特色のある風習のあったことが、近世の書物に記され、たとえば房総地方には、わらで牛馬の形を造って戸上をかけ、牛郎、紅女を迎えるのだとしたり、信州松本では、縄を路をよこぎって軒ごとにかけ、紙衣をきせた人形を幾つとなくつるというなどもおもしろいと思います。今でも地方色のある七夕祭は多く残っていることでしょう。

現代では、たとえば仙台や平塚などの七夕祭りが全国的に有名です。これはたいへんに豪華なもので、あらゆる趣をこらした飾りものを商店街にすきもなくつりさげたさまは、何とも見

事です。しかしこのような形で行なわれることには、あまりに商業主義と結びついていて、七夕祭り本来の、素朴で優雅な古代人の祈りからはあまりに遠いものに感じられます。多かれ少なかれ都会における七夕祭りには、このような姿が、他の節句などでも同様ですが、どうしてもみられるようです。

昭和七年に刊行された古い平凡社の百科辞典の「七夕」の項に面白い記載があります。

「……明治に至つて地方民俗に於ける七夕行事はとにかく東京に於ける七夕は頗る衰微し、そのまま大正、昭和に至ると好事の者の他全く七夕行事を顧るものなきに至つた。これを遺憾として東京市当局の間に復興の議が唱へられ、昭和二年より日本風俗研究会指導の下に七夕祭を市の年中行事として行ふに決し、市民祭として毎歳行はるるに至つた。」

このように東京のような大都会では、近代になって古い行事の伝統がたち切れ、あらためて市民祭というような形で復興されているので、この辺に強く商業主義と結びついて来る素地があるのではないのでしょうか。そして都会では夜も明るく照らされ、加えてスモッグで、天の川など見ることができなくなりました。加えて商業主義むき出しの七夕祭りではあまりにもわびしい現代ではないでしょうか。

(吉川弘文館)

つぶやき



山村 きよ

保育の心を求めて

ゆれうごく幼児教育界にあって、多くの学者先生はそれぞれの自説をかかげて幼稚園界に迫っています。

幼稚園の先生方はいろいろな学説をまともにうけてなやんでいます。

母親たちは幼児を目の前において利用されたり、自己流の考え方でそれらをうけとめて、幼稚園の上司や、若い先生方をつきあけることもあります。

なやみ多い幼稚園の現場、先生方はそうした中で「何かを知りたい」「保育の心をたしかめたい」などの気持ちであせり出した三、四年前のこと。

こうしたなやみを持つ人たちが、時代の波にゆられている時、お茶の水幼稚園長として就任されたのが周郷先生でした。

保育の心を求めて、純すいな幼児教育者のまわりに集まった人たちはたくさんありました。私も母校、お茶の水幼稚園の現場には関心を持っておりましてので、さっそく園長室を訪れて

単刀直入に「今まで先生の考えておられたことを早く実現してほしい」とおねがいました。

そしてたびたび周郷先生とおあいして、時には「お茶の水は幼稚園から大学までを一つにして大改革が必要だ」と話されたこともありまして。私は今でもそのことばを信じて、母校の大改革をたのしみに待っている卒業生のひとりです。

ふりかえってみますと周郷先生は、いつもいつも「むずかしい、むずかしい」と口ぐせのようにいわれながら、何かを実現させておられました。それは園長室から流れ出るすばらしいメロディー（園児の耳にも響いていたと思います）、わざわざ田舎まで山羊をつれにいらして園庭に解放なさったり、はだしの子どもたちとたわむれたり、暮のおもちつきや、附添なしの一泊旅行など、子どもたちのためには数多くの思い出を残し、お母様方には感動のひとつときを持たせるようなお話をされて、名残りをおしまったことと思います。

私たちみどり会研究会員によせてくださったご好意は、やがて「保育のこころを求めて」というテーマのもとに集まり、研究熱心な人たちの心のつながりをつくり、今夏は三回目の研究会をもつことになりました。この研究会の特徴は、先生方を囲んでみんなが同じ食堂で三食共にして、夜昼を語りつくせる会合で、どこからの圧力もなく、すべてを自費で、みんなの力で

開会から閉会までを実に快よく終ることの「魅力」だと思えます。いつも小さなみどり会が、こんなに大きな仕事をしたのか？と会員を喜ばせる研究部の仕事でもあります。この基礎づくりに大きな役割をはたして下さった周郷先生に大きな感謝の気持ちを表わしたいと思います。

### 粗製乱造されている幼稚園の先生

幼稚園が義務制でないためか？国は幼稚園の増設には力を入れてくださいますが、幼稚園の先生を造り出すことにはあまり力を入れていないように思われます。とくにその「質の問題」では？……

毎年開かれる東西に分かれた指導者講座にも特定の人、しかも毎年同じ人たち（私学の場合）が選定されていて、現場にはあまりはねかえってこないように思われます。

幸いと各都道府県では自主的な研究活動が盛んになってきたのでうれしくは思いますが、……そうした中で耳にすることは「粗製乱造の先生が多い」「幼稚園の先生としてのモラルの低下」ということです。

最近、保育所増設によって十月～十一月には多人数の採用が決定してしまう中には、積極性のあるすぐれた学生が多く、十二月ごろから採用が始まる私立幼稚園のみじめさは格別です。私たちにはとても考えられぬ合理的な考え方で（待遇がよくて、

幼児の昼寝の時間に何でも雑用が片づけられるから帰宅時間が早い、などと）どんどん公立保育所に就職決定をしてしまう場合が多いのと、一昨年あたりから増設された幼稚園教員養成所などを出て来た人たちの中には、現代っ子の特徴をもった人たちも多く、少し気に入らぬことがあれば友だちをさそって、さっさと職場を替えてしまうような幼稚園の先生が増えてきたことはなさない事実です。甚しい者は入園式の二週間前に退職してしまうなど、モラルの低下はあちこちで耳にすることです。また、こうした中で私たち現場の者のなやみは、多くの大学の中には「実際よりも理論を」と叫ばれる先生方もおられて「教育実習のさせ方のむずかしさ」も心配の種です。それにもまして心配なのは、増設された教員養成機構では「実習場所を学生が自分で見つけねばならない」学校もあるらしく、どんな幼稚園でも手伝っていれば自然と免許状がとれてしまうようなことを考えた時、「どんな先生」が世の中に流れていくのか？

幼児が求めている「保育の心を知っている先生」には程遠い感じがします。昔から「石の上にも三年」と基礎づくりの必要がうたわれているのに、幼稚園の現場では二年～三年で去っていく先生の何と多いことか？がっかりするこのごろで、残念でなりません。

（一九四八、三、三〇）



# 幼児教育講習会

## 日本幼稚園協会主催

本講習会を例年のように開催いたします。

本年も昨年と同様に、第一部（午前の部）は大学講堂で、第二部（午後の部）は、お茶の水女子大学体育館で実習を主として行ないます。混雑をさけるために、第二部については会員を前半の二日間（Aの部）、後半の二日間（Bの部）に分けて、それぞれ人数を制限いたします。ご了承の上ご参加ください。

### 第一部 午前の部（九・三〇より）講演

会期 昭和四十八年七月二十二日（日）— 七月二十五日（水）

会場 お茶の水女子大学講堂

内容

二十二日 幼児にあらわれる人間の原型

お茶の水女子大学教授 津守 真

二十三日 幼児教育の原点

— 健康のしつけの面から 医事評論家 石垣純二

二十四日 現代社会に於ける幼児教育の問題点

— いろいろの実例を通じて

上智大学・東京家政大学

お茶の水女子大学講師 森田宗一

二十五日 現代の子どもの歌がめざすもの 作曲家 湯山 昭  
なお、以上のプログラムをダイナミックなものにし、受講者の「参加」の機会を実現するような具体的運営を考慮しています。

### 第二部 午後の部（一・〇〇—四・〇〇）音楽リズム 実技

会期 Aの部 七月二十二日（日） 二十三日（月）の二日間

Bの部 七月二十四日（火） 二十五日（水）の二日間

定員 各部それぞれ八〇〇名

会場 お茶の水女子大学体育館

内容 創造性を培う幼児の遊び

お茶の水女子大学附属幼稚園関係教官

会費 第一部（四日間） 八〇〇円

第二部 A の部（二日間） 二日間で 四〇〇円

B の部（二日間） （印刷物代別）

なお、A の部と B の部は同一内容です。

会費は当日会員証（復のはがき）をそえてお払い込みください。

申込期限 六月十五日付の消印分より受付開始（それ以前のお

申し込みはおことわりします）ただし各部とも定員になり次

第しめ切らせていただきます。

申込方法 ひとりにつき往復葉書一枚を次の様式にしたがつて

記入し、復信の表に返信先の園名・園所在地・郵便番号・個

人名を必ず書いて申し込んでください。

(1)	氏 名	園 名
(2)	勤 務	在 地
(3)	同 所	番 号
(4)	参 加	希 望
	・ 第 1 部	第 希 望
	・ 第 2 部	第 希 望
	A の 部	第 希 望
	B の 部	第 希 望

信 往 信の裏面

・ 葉書をタテにして  
ヨコガキ

・ 宛先 東京都文京区大塚二―一―一 一（一一一）

お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係

・ 第一部のみ参加希望の方は(4)にその旨お書きください。

・ 第二部参加希望の方は、(4)に A の部、B の部、いずれを第一希望、第二希望とするかを明記してください。

・ 第二部は、申し込みが定員に達した場合は申し込み順に会員

を決定してしめ切ります。また人員の都合で、第二希望にお

まわしすることがあります。

・ 復の葉書の裏面は会員証を印刷しておとだけします。定員に

達した以後の方にはその旨ご通知いたしますので、復の葉書

の裏面には何もお書きにならないでください。

・ 第一部・第二部とも、当日の申し込みはおうけいたしません

のでご了承ください。

・ 第二部受講の方は、運動に適した服装・靴をご用意ください。

（注意）

・ 電話でのお申し込みはおことわりいたします。

・ 電話でのお申し込みはおことわりいたします。

・ 宿泊 ご希望の方は七月十五日までに左記へ直接申し込んでく

ださい。（朝食付一泊二、〇〇〇円程度）

つる家ホテル 東京都新宿区下宮比町一三

電話 東京（二六〇）三三三六―三三三九

（国電飯田橋駅東口）

## 想像上のキャラクターと 子どもたちとの関係



室谷 幸吉

子どもら、ことに男の子にとって今は怪獣時代です。怪獣に明け怪獣に暮れる、といっている毎日です。ちょっと以前まではもっぱら怪獣図鑑・怪獣辞典・怪獣トイでした。それが現在は怪獣カード一色です。一人の子が怪獣カードを手に行っていると、おいしい物にハエがたかるようにワーツと友だちが集まってきます。数十枚ものカードをさしこんだ怪獣アルバムを持っている子は王様みたいなものです。兄と妹で、カード集め競争をし、「きょう三枚ふえた」「カード付きのお菓子を買って」と手持ちの数を競いあっている例もわたしは知っています。「怪獣カードで泣く子もダマル」そんな時代ともいえそうです。

三歳のY君は、夕方になると、その時間を忘れずにテレ

ビにスイッチを入れ、ピタリとダイヤルを回します。何曜日の何時には何チャンネルでこれこれ……と、週間の番組をキチンと頭のなかに入れていて、ほとんど見のがすことはありません。口をポカンと開け、目をすえ、吸いこまれるようにテレビを見ています。今、怪獣がグロテスクな足を持ち上げ都会のビルをふみつぶし、電車をけとばしています。すごい迫力シーン！

「ビルや電車はみんなオモチャだよ。作りものだよ。あの怪獣だってホントは人間が中に入って動いてるんだよ」

Y君への強烈すぎるショックをおもんばかり、いっしょに見ていた父が解説を加えました。ところがY君は、憤然と、

「ちがうよ、ちがう」(玩具であったり、人間が化けてやっているんじゃないノ) そんな思い込みでキッパリ言い切りました。Y君は怪獣を実在する、と信じているのです。

わたしは今年の二月、七歳児を中心とした七十人ほどの子どもに、(怪獣が本当にいると思うか、いないと思うか) 問うてみました。東京の山の手に住む中流家庭で、男女を混じえた子どもたちは、圧倒的に「怪獣なんかいない」というのです。どうも五歳ごろまでは怪獣を実在視しており、それ以後徐々に非在視するものがふえ、八・九歳ごろにはほとんどが実在を否定するようになる……そんなふうに考えられます。多くの子は怪獣は作りものさ「チャックのついたぬいぐるみで、中に人が入って動いている」といいます。なるほど、日ごと日ごと、のべつまくなしの怪獣とのご面接では、見る子どものも目も肥え、対象への批判も厳しさを加えてくるでしょう。テレビに登場する怪獣にしても、こう数がふえ、製作費も切りつめて、となればゾンザイになるのも避けられません。チャックを見とがめられる破目にもなります。ドルゲ・ライドン・モンスタード・エレキング・ゴリアス・ジャイロゲスト、100単位にもなる怪獣の名を、たてつづけに唱える怪獣博士、ああこのみこ

とな記憶力を漢字や算数に向けてくれたら、と願いはすれど、どっこい調子よく問屋はおろしてくれません。

いまひとつ、怪獣と張り合い、やつつけ役に回る超能力人がいます。スーパーマン・ウルトラマンです。怪獣と超能力人とでワンセットです。これらは今の大人たちが作り出して子どもらに与えた神話でしょう。暴力神Ⅱ荒御魂の代表が怪獣で、平和神Ⅱ和御魂の役割がスーパーマンだと考えたらどうでしょう。由来、人間は神話なしには生きられぬ生物です。神話に、人間の、民族の理想・祈念・願望などを反映させるのです。神話は時代とともに動かし、動いてもいいものだと思います。ところで今日の大人が子どもにプレゼントしつつある怪獣神話——わたしは多分にお粗末で、イメージも貧困だと思っています。もう少し上質で深い思想性に裏づけられたものが作れないのでしょうか。

「怪獣なんか作りもの、でも楽しくって——」という子どもらの割り切った身構えの奥に、いまひとつ、わたしは創造的なエネルギーを見いだします。

「マンガも(怪獣も)大体話(の筋立て)がきまっていてツマンナイヤ」と、積極的にテレビに背を向ける子もいくらかいます。子どもの身うちに脈うつ健康な知的エネルギー

ギー、そうです、(与えられるだけでイージーにことを済ましている怠惰)をこのエネルギーでつきくずし、みずからが作り出していく姿勢に変えていくことです。子どもの知性・情意をゆたかにみがきこんだ気宇壮大な神話を、親も教師も、もちろん子どもも一つになって作りあげられたら、どんなにすばらしいことか。

怪獣づくのも、子どものエネルギーの反映です。このエネルギーを汲みあげ、未来を志向する創造者の身構えに変えていく、その知恵を、パイロットである指導者(教師や親)は持続しなければなりません。

「神」——この超越的絶対者を認めるかどうか。実在するかしないか。論は錯雑し、結着はつきますまい。子どもは怪獣ほどには、日常生活レベルで「神」には付き合っていない。それにかかわらず「神さま」というコトバを使わない子ども、またおりません。子どもの心に、自然に「神」が芽生え「神」がわかってくるのでしょうか。どうも神という意識や観念・概念は、大人からの刺激によって作られていくものようです。

神棚もなければ仏壇もなし、といった新世帯がふえつつ

あります。またたまにあっても過去の時代の家具視され、お守りをするのは年よりだけという家も珍しくありません。神信心、仏信心の親の姿を目にする子どもは圧倒的に少ないのです。家庭の中に宗教味が乏しいこの現象が、子どもの心を神に結びつけるかどうかに深く関与します。視覚ではとらえようのない神への関心や意識は、生活する場のふんい気や家族の日常行動から、心情という内面的な網によってすくい上げつつ育つものなのです。その心情の網でいくといえるべき魚そのものが見当たらなくなった、というのが今日大方の実情でしょう。無神論的家庭に無神論の子が育つのは理の当然です。若い母親による子捨て・子殺しがふえつつありますが、これなども宗教性を欠いた家庭と大いに関係があります。「子どもは神からの授かりもの」「人間はすべて神の子」という考えをもつなら子どもは惨酷に扱えません。世間では、世俗的な功利打算のダシに使われる似而非神がコロコロ肥っておりますが、魂の浄め手、命の救い主としてあがめられる神は本当に影薄くなりました。「神は死んだ」というよりは「神を殺した」現代人たち、その風潮を正確に反映して子どもたちは「神さまなんかいるわけではない」と言い切るのです。神の実在支持児は十年

前には94%（五―六歳児）いました。このたびの調査では75%（七歳児）にへつています。神の存在を信ずるのが幸せか不幸か。今それにはふれないとして、時代が、つまり身近な人たちのコトバや行動が、子どもを神に近づけ、あるいは逆に遠ざけもする事実は認めねばなりません。「悪いことをしたけれど、バチはあたらなかった」「ねがいごとをしたけど、きいてくれなかった」――だから神なんかいないと言いつける子どもたちからはじめて、神の存在に背を向ける多数の子どもたちが、それでは生涯にわたり神否定で通すか、そうではなくいつか神の肯定派に変わるか、これは個々人の心の秘奥に属することで、予見は無理です。ひとりひとりがその人にふさわしい曲折をたどり、あるいは神に接近し、あるいは神から遠ざかることでしょう。

神の心が「愛」に通ずるとしたら、神への深い思いや憧れを持つ人間は幸せです。神へのいざないを感じさせる家庭経営・幼稚園や学校の教育方法に熱意を向けねばならぬ理由がそこにあります。

カップ・鬼・雷さま・おばけ・火の玉・天国・地獄・サ  
ンタクローズ・人をばかす狐狸の類など、民族が生んだ想

像上のキャラクターは、過去になった長い時間の洗礼を受けつつ、ある物はその性格をいよいよきわ立たせ、ある物は多少変質しつつ、なお今日に生きつづけています。これらの想像上の性格者は、いいにつけ悪いにつけ、日本人の生活に複雑な色合いをあたえ、精神の深いところで相当な役割をにないつつあります。どの一つかをとり出して、たとえば「カップが悪いと信ずるのはいいか悪いか」を論じてあまり意味はないでしょう。カップの存在を信ずるのがいいのでも悪いのでもありません。もともと、度外れに強くオバケがいると信じ、そのために日常生活が普通に送れないとあつては困ります。病的になり生活が不順調にならぬ限り、信ずるも可、信じないも可でかまわないでしょう。しかしわが子が、あるいは集団としてクラス児が、精神の内面でどんな段階にいるのか、どのように想像上のキャラクターを理解しているのかを知るのは、その他の広範な子どもたちの心意活動に正当的確に対処するための、まことに有益有効なよりどころになるのです。

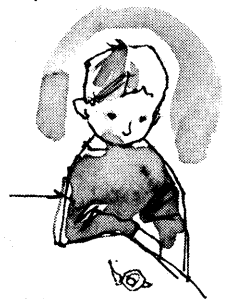
過日ある編集記者が来訪しました。記者の考えは、ちちめていうと、「十年前の子どもに比べれば現在の子どもたちは、科学的文明がすこぶる進んだ社会に生きているのだから

ら、当然のことに架空なキャラクターについても強い否定的志向を持つのではないか」というのです。だから十年前の子どもらに、カッパの非在派が多くて（五・六歳児で60%）今の子どもらに肯定派がむしろ多い（七歳児で46%）のはへんではないか、というのです。へんなことはありません。実在・非在は対象に対する理解の深さ・批判する力の大きさによって微妙に揺れ動くものです。保育園や幼稚園で、また学校の教室で、学習集団として子どもらが素素、鋭い批判力や的確な思考力を身につけるような教育を受けているかどうかで、対象への対応状態がガラリと変わってくるのです。家庭生活の中で、より多くは学習群としての意図的教育を受ける中で、物の見方・感じ方・考え方をどのようににつかっているかに着目する必要があります。カッパやおばけや火の玉・鬼など、教材として一定の場を与えられたものではありません。ですから、それらに対する子どもたちの心的姿勢がまちまちなのは当然です。今ひとつ成績のいい子・頭のいい子は架空な絵そらごと人物を概して信じないであろうし、頭の弱い学習に遅れの目だつ子が信ずる傾向が強いであろう——こんなふうに一般の人は考えるようです。しかしそんな図式は成り立ちません。むしろ

成績すぐれた優等生的な子は、大人の言うことをハイハイと聞き、物語の中味も（その通りその通り）とうなずきつつ受け入れ、万事に従順で肯定的です。そのためにおばけも天国もカッパも指し示される通りに肯定して受容する傾向が強いのです。それに対し、成績はすぐれなくとも活動的な子・生活的知恵にたちまざる子がどっちかというと、敵しい批判的姿勢を保ち、ヤミクモに信じないといった傾きが感じられます。

# 私の保育

―失敗が失敗とわからない二年間―



太田 一枝

一、はじめに

“松阪市教育委員会勤務を命ずる”―昭和四十六年四月一日  
―この辞令で私と幼児との出会いが始まりました。

幼児教育者を志してから数年、ようやく念願がかない、その  
第一歩をふみ出せると、大きな期待と少しばかりの不安を胸に  
この日を指おり数えて待っていました。

“幼稚園”という言葉のムードを楽しみながら、どんな幼児  
たちがいるかしら? どんなことをしてあげたらいいのかしら  
私になつてくれるかしら? 四月にはこんな歌を教えてあげ  
たい、夏になったらこんな遊びをしたい、お部屋にこんなかざ  
りをして……と頭の中であれやこれやと考えながらその想像に

酔っていました。

二、プール教員の辞令を手にして

(産休病欠などの補助教員)

ところが幼稚園教諭として採用されたはずなのに“教育委員  
会勤務”となつていゝのです。私はいったい何をすればいいの  
かしら? 私は驚きとともに、なんとも言えない悲しい気持ち  
にさいなまれ、こんなはずじゃなかった、私の夢や期待がガラ  
ガラと音をたてて崩れていくような気がしたのです。

このプール教員は電話一本で市教委より勤務先を指示され、  
その園へとんでいくわけです。そのため、今度はどこへまわさ  
れるんだろう? という不安がいつも心のどこかにひっかかっ



ていて、私の一日二十四時間すべてに安定感というものが感じられなかったのです。

新しい次の職場でまず突きあたるのが、そこでの幼児との人間関係、職員同志の人間関係です。少しでも早くその職場になじもうと、一生懸命努力をするのですが、人間として、保育者として未熟な私には、かなりの時間を要するのです。たとえば、九月にもなると幼児の側では、先生は当然自分のことをよく知っていてくれるものと思っているのに、私にはひとりひとりの幼児の家庭のようすまでもわからないために、幼児からの話しかけにもあいまいな受け答えしかできず、幼児の口からは「僕らの先生はいつくるの？」ということばが返ってきます。こんな時、私は自分だけのクラスをもちたいとひしひしと感じました。

このような失敗を重ねながらも、少し慣れたかな、と思うころにはまた電話一本でもう次の職場へ出勤しなければならぬのです。

このように、常に不安とイライラの気持ちをもちながら幼児たちと接していったのです。教師自身が常に不安定なため、幼児たちの感情を受けとめてあげるところか、ひどい時には自分の感情をむき出しにしてしまい、そのあとはこんな自分への腹だ

たしきで涙と口惜しさでいっぱいになってしまいます。また、それぞれの職場で先輩たちが議論されていることばを聞きかけ、幼児教育の専門用語を私は一生懸命ひろいこみました。

例をあげると、幼児の感情を受容する、幼児との出会いを大切に、一日の流れは水の流れの如くに、教師の外罰的思考は幼児の成長にはプラスにはならない等々。これらのことばを覚えることが勉強であるとも考え、フリー職員の学べる場とさえ考えておりましたが、今になって思えば、ひとつひとつの言葉と幼児の具体的な行動が結びつかず、学生時代の試験のための勉強みたいに自分自身の充実にその言葉が役立っていなかったのです。

産休明けの先生が出動されたその日から、私の前をとおろしていく幼児の姿に自分はこのクラスの担任ではないという寂しい気持ちとともに、何をしたらいいのかわからないという日が続くのです。

幼児と生活するときには、最初から順序だてて先輩の先生方の指導が受けられ、見よう見まねから少しずつ自分のものを見いだしていけるというのが私のねがいであったのに、地域における幼児の生活のちがいや、園舎など施設を含めた種々の教育条件のちがうところで、こま切れるに指導を受けても、一年間

の保育の見通しがない私にとっては、まったくわからないことばかりが、続きました。

### 三、やっと 級を担当して……

このような気持ちの中で、長いようで短かった一年が過ぎていきました。

一年間いろいろな園で得たことを、今年こそは幼児の発達をみながら、経験豊かな先輩の指導が受けられると期待して二年目を迎えました。ところが、昭和四十七年度の人事異動でも、例年新採用の者や経験のすくない者は、交通の便の悪い周辺部の公立小の併設園へ配属されるという例にもれず、経験年数のほとんどちがわぬ者ばかり三名という半農半漁村の松阪市立西黒部幼稚園への着任が決まったのです。

はじめての四月、担任する幼児たちの入園準備、幼児を受け入れるための環境を整えなければならないのに、

- ・入園当初はどんな遊具をいくつぐらい用意すればいいのかしら？

- ・粘土はどこへ置こうかしら？

- ・ままごとコーナーはどこへ？

- ・絵本はどんなものをおけばいいのかしら？

- ・連絡ノートは何を連絡してあげればいいのかしら？

このような自分の質問に対して答えがとっさに頭にうかびません。昨年度一年間、各園を回っている間に、それぞれの園で充分配慮されていたであろうことが、自分の経験したことからきた解答として出てこないのです。

ただ私の頭の中には、

「あっ はさみは共同で使っていたかなあ……」

「自由に描いたり、製作するコーナーがあったなあ……」と次々に各園のようすが断片的にばかりうかんでくるのですが、さて、それはなぜそうされたのか、教師のねがいや意図が全く汲みとれないままだったことに、今ごろになってようやく気がついてきました。一番困ったのは、四歳児を担当して、二年間の保育内容（幼児の活動）の見とおしがないことでした。そのために、次のような失敗が多くありました。

### 四、自分の失敗を幼児のせいにしてしまったこと

二月のある日、

隣の部屋で、五歳児がたのしそうに紙版画あそびをしているのを見て、私の組の四歳児たちは「僕もしたい」「僕もしたい」と口々に要求を出してきました。そこで私は、このような幼児

の発達にあっていなくても、教師が困難な点をお手伝いしてあげれば良いということを聞きかじっていたので、紙版画をすることにしました。そこでさっそく昨年度の経験を生かし、四歳児であるから、台紙を五歳児にくらべ半分の大きさ（全紙1—16の大きさ）で鬼の顔を作ることになりました。このようにして、五歳児のようこんだ活動を四歳児に経験させてみたのですが、鬼の顔を作るということを、四歳児は、

「鬼には キバがあるんやぞ」とか

「つのがあるんや」など

部分々々でしかとらまえずに、鬼というイメージが自分の印象が強い所だけの表現になってしまいました。

教師としては、五歳児の作品からくるイメージがどうしても強くて、四歳児の表現の特徴がわからず、その仕事の途中での助言や、手伝ってあげる場所も教師自身がわからなくなり、結果的には教師自身がその表現に失望してしまつたのです。

そのあと、このことを先輩に話したところ、一口に幼児がうつつしてあそぶ」といっても、さまざまな活動を発達に応じて経験させてあるから、紙版画も積極的に楽しむことができるのだと、教えてくれました。私はそれを聞いて、幼児の活動だけをみて、自分のもっている経験の浅さにも気付かずに、

幼児が要求したとか、喜ぶとかいうことだけで、全体の見ともしもなく五歳児の活動を単純に四歳児に経験させ、その作品がよくないのを四歳児という年齢のせいにしておりました。

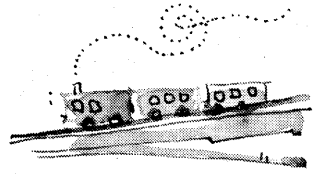
そのほか、四歳、五歳の幼児の発達の見通しができないため、一年間の指導計画が立てられずその場かぎりの活動が多く、全く自身自身の感情をむき出しにした保育に終わってしまったような気がするのです。

## 六、おわりに

こんな現実直面して私は、去年の一年間はいったい何をしてきたのだろうか、何が私に残つたのだろうか。経験のないものが、プール制教員としてまわることは、行政的には当然の措置ではあるが、この私のような教師と出会つた幼児たちにとって、充実した幼稚園生活であつただろうか？

このような感情をもちながら、張り切つて担任した四歳児を年長組にして、本年度、桜の花の咲く門を真新しいスモックを着て登園する四歳児を再び担任した今、あやまちをくり返さないでおこうと心に誓つて、ひとりひとりの幼児を迎えています。

（松阪市西黒部幼稚園）



## 幼稚園の外から見た子どもと 中から見た子ども

永井 康子

思えばもう七年も前のことですが、家で幼稚園を経営している関係で、私はお茶の水女子大の幼教にはいました。そこでの二年間の学びは本当に素晴らしく、子どもがいだった私が、どうしてこんなに好きになったのかと思うほどにまで、私を変えてしまいました。ぜひこのまま幼稚園の先生になりたいと思ったのですが、体育科へ編入することになりました。児童科ではなく体育科を選んだのは、村田先生のご指導を受けているうちに、自分自身の体育面における足りなさを痛感したからでした。そして二年後、私の家の幼稚園児の交通事故がたて続けに三件起きました。ぜひ何とかしてあげたいという純真な気持ちと、家で経営しているのだからいつでも幼稚園の先生になれるという安易な気持ちから、私は婦人警察官として警視庁にはいったのです。

私が入社した当時の婦警さんの数は微々たるもので、男性の職場における女性の扱い方にも不慣れなため、本当におそまつな働きしかできませんでした。たとえば交通安全教育にしても、焼け石に水であることをしみじみと感じ、情なくなりました。私は、幼稚園の子どもたち、幼い子どもたちを園の外から守ってあげたいと思っていました。なぜならば、交通事故は道路上で起こるのですから……。しかし終局には、交通事故防止は、家庭及び園内の指導から始まらねばならないことを、悟ることになったのです。

\* \* \* \* \*

警視庁では、子どもの事故防止のために、紙芝居、スライド、指人形などいろいろな小道具を使って、ある地区によってはた

いへん熱心に指導しています。その指導にあたるのが多くの場合婦警さんなのですが、彼女らが受ける六ヶ月の教養期間中には、子どもに関する知識はほんの少ししか与えられないのです。ただ単に「子どもは衝動的であるから、とび出し事故防止になるような指導をすること」を教えられます。紙芝居やスライドのほとんどは、そのようなものだったと記憶しています。婦警さんたちは、制服を着て幼稚園に出かけて行きます。どの園へ行っても、子どもたちは集中力を発揮して見たり聞いたりしますから、婦警さんたちは、まあよかったと安心して帰るのです。私も初めはそうでした。しかし回を重ねて行くうちに、安心してはおられないことがついたので。子どもたちにとっては、ついぞ見かけない婦警さんの制服と模造紙大もある大きな紙芝居が、あまりにも珍らしかったのです。多くの婦警さんたちは、子どもの遠近感、相対した時の左右の弁別能力が、自分と同程度であるかのような錯覚をおこしてしまうのです。そのため、かえって子どもたちを混乱させてしまうことさえあります。

手を引いて渡って行くのです。警視庁では、制服の威力でもって事故を防止しようという訳で、警察官を増員してきたそうですが、私がいも制服を着て立っていたら、あの親子は横断歩道を渡っていたかもしれません。誰でも、横断歩道を渡らねばならないことを知っています。しかし、車が来なければ近道をしなくなります。昨年夏、私はオーストラリアへ行きましたが、横断歩道を渡っているのは老人と子どもだけでした。どこでも同じだなあと感じておりますと、台湾では、車の流れの間をぬって人々が道路を横断しているではありませんか。信号が有っても全くその機能が認められていないような交差点もありました。

このように、交通面だけではなく公衆道徳は、外からいくら声をからして叫んでみてもよくなるものではないのです。内側から、個々の自覚によってできあがっていくものではないかと思うのです。また、そのような指導がなされねばならないと思うのです。

このような訳で、婦警さんであった私は、全くと言っていいほど失望してしまいました。幼稚園へ行っても、子どもたちと真に親しい交わりなどとてもできませんし、満足のいくような安全教育はできませんでした。大きな組織の中でいくら情熱を燃やしていても、やがてそれは消滅してしまいそうでした。私

が第一線の婦警さんとして働いたのは本当に短い期間でした。やがて新しく採用された婦警さんを教える立場になったのですが、子どもたちとは遠ざかるばかりでした。自分自身の無力さを痛感すればするほど、私の心は幼稚園へと引きもどされて行きました。こうして警視庁とは、二年でわかれることになったのです。

\* \* \* \* \*

幼稚園の先生になり無我夢中で過ごしたこの一年間は、私の二十五年という年月の中で、最も張りがあり、最も素晴らしい日々でした。幼教時代に受けた一つ一つの教えは、四年間園を離れていたにもかかわらず、非常に鮮明な記憶となって残っていました。同期生はもうすっかり先輩になってしまっています。それなのに私はまだ一年生のかけ出しでした。牛島義友先生のおっしゃったように、全く「自信のない保育者」でした。でも二十四人の子どものひとりびとりが私自身の本当の子どものように感じられ、心から愛してきました。それぞれが、遅かれ早かれ私と心の交わりができ、親しい関係を持つことができたのです。これは、婦警さんであった時には決して味わうことのできなかった体験でした。そのころ接した子どもたちは、文字通り複雑で、私には何のかかわりあいのない大人の中の子ども、年齢が少ないがゆえに「子ども」と呼ばれている人々でした。

それだけに、ある面では気が楽でした。安全教育という与えられたノルマさえ果たせば、後はどうなっても責任は無い（と言っただけ）のオーバーかもしれない（が）のです。

ところが、幼稚園のクラス担任の先生となるとことは重大です。はつきり言ってしまうと、私には四年間のブランクがありました。その間先生になられた方々は、数々の講習会、研究会に出られ、新しい保育技術を身につけて来られました。しかし私には何も無いのです。幼教時代の実習の経験と、イスラエルのキブツの幼稚園でのちょっとした経験以外に何も無いのです。私は毎日毎日が不安で反省することばかりでした。初めのころは、二十四人のひとりひとりに目を留めることができませんでした。だったので、日々各々の行動をチェックしました。しばらくすると、全体の中の個人が見えてきました。そこで毎日、ひとりに対し最低一回はほめてあげることを試みました。全く手に負えないような子どももあり、非常にむずかしく思われましたが遂行しました。このころから、私と子どもとの間に、たいへん親密な関係が生まれてきたのです。

生まれてからまだ三年余りしかたっていない子どもたち、いったい何を教えたらいいいのでしょうか。カリキュラムに従って教えていくだけで果たしていいのでしょうか。私にこの解答を与えてくれたのはオーストラリアの子どもたちでした。彼ら

はマナーの点で、たいへん厳しくつけられていました。どんなに小さくても、肩が触れたりした時すぐに“ごめんね”と言えるのです。しかし日本ではどうでしょうか。他人に親切にするという点においても“親切運動”という形で取り上げられるほど減少しています。“お友だちと仲良くしましょう”といくら先生が声をからして言ってみても、子どもたちはいいとうしたらいいのか、はつきりつかむことができないのではないのでしょうか。お互いに許しあうことを学んでいかれるように、指導しなければならぬのではないかと私は思いました。

これは社会全体に言えることであって、幼稚園内の教師に依存しているものではないと思います。本当は家庭でなされるべきことだと私は思います。しかし園でせざるを得なかったのです。三歳の子どもたちは本当に純真でした。いろいろの面で、彼らはお互いの理解を深めて行きました。たとえば、“どうもありがとう——どういたしまして” “ごめんね——いいよ”が、クラス全体に、こんなにまでも徹底するとは思いませんでした。というのは各々の家庭にまで、その影響が及んだという事です。

\* \* \* \* \*

振り返ってみると、婦警さんとしての二年間は事実を客観的な立場で書類にするという、退屈な日々でした。しかし幼稚園

における一年間は、書類にする間もない、すぐに反応のある、めまぐるしくて豊かな日々でした。

警視庁ではよく皆さんがこうおっしゃいました。

“幼稚園なんて、ただ子どもを遊ばせておくだけでいいのでしょうか?”

“いいえ、ここにこそ大切な教育指導がなされなければならないのです。交通事故防止も少年の不良化防止も、ここにポイントがあるのですよ”と答えますと、けげんそうに、“そんなものですかね?”

と首をかしげておられました。

要するに、何を第一に考えるのかの違いではないでしょうか。私が警視庁を退職した理由を、いろいろな方々がお尋ねになりました。そのたびに私は答えました。

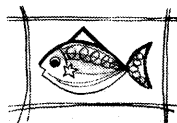
“Enforcement よりも Educationの方が私には向いているのです。私は子どもたちが好きで好きでたまらないのです”と。幼稚園は素晴らしい人間関係の場だと思えます。この一年間に子どもたちがいかに成長してきたかを思い返してみるたびに、私は、ひとりひとりの子どもと親しく交わることできた喜びを、しみじみと感じるのです。

(大泉双葉幼稚園)

# 幼稚園児の教育費について(1)

井手達子  
金田和恵  
馬場紀子  
横田京

## はじめに



四月に入園したあどけない園児たちが迎えた初めての集団生活も、はや三ヶ月を経過した。毎日の通園にも慣れ、仲良しの

友だちができ、中には、そろそろ腕白ぶりを発揮する園児もみられるところであろう。これら園児の入園に要した、選抜料にはじまる、入園費、寄付金、施設設備金、制服等の出費はかなりの高額となり、まだ若い両親の家計にどのような影響を与えたのであろうか。ここ十数年来、両親の子どもの教育水準向上に對する強い志向に伴い、その家計が負担する子ども教育費は、年々増大してきている。また、昨今の急激な物価上昇の中で、園費もまたその例にもれないようである。

一方、家庭においては、幼児の才能を早期に啓発することの

意義をうたった「英才教育」論が唱えられ、英会話をはじめピアノ、バイオリンと四、五歳の幼児が二つも三つもの「おけいこごと」をしていることが新聞等でも報じられている。その月謝も相当な額に及ぶであろう。

幼稚園に納入する「園費」については、文部省や都庁で行なった調査があるが、それも入学案内書に記された入園費、授業料のみで、寄付金等には触れていない。先にあげたおけいことの月謝を含めた、文房具、おもちゃ、絵本、マンガ、家庭でのお誕生会等の「家庭教育費」に関する詳細な調査は、現在ほとんど行なわれていない。中教審答申による幼稚園の義務教育化の問題とも関連して、家庭教育費を含めた園児の教育費全般にわたる実状を把握し、あわせて幼稚園教育や園児の進学に對する両親の意識の一端をとらえるために行なったのが、わた



表 1 調 査 園 児 数

単 位：人

ク ラ ス 調 査 園	年少クラス		年中クラス		年長クラス		合 計	
	意識	教育費	意識	教育費	意識	教育費	意識	教育費
国立 A 幼稚園	13	13	30	30	29	29	72	72
公立 B 幼稚園	—	—	—	—	37	37	37	37
公立 C 幼稚園	—	—	32	30	25	23	57	53
私立 D 幼稚園	15	15	10	10	18	17	43	42
私立 E 幼稚園	—	—	20	20	23	20	43	40
私立 F 幼稚園	19	18	19	19	31	31	69	68
私立 G 幼稚園	12	12	16	15	35	32	63	59
私立 H 幼稚園	14	13	36	33	31	30	81	76
私立 I 幼稚園	11	10	29	29	30	29	70	68
合 計	84	81	192	186	259	248	535	515

くしたたちのこの調査である。今月号から数回にわたって、その調査結果の概要をご報告したいと思う。

# 一、調査の概要

調査時期は、昭和四十七年の十一月一日から十一月三十日までの一カ月間とした。

調査対象は、東京都区内の幼稚園のうち、国立一、公立二、私立六を、年少、年中、年長組の各クラスにわたるよう任意選抜した。その際、調査対象となる幼稚園は、その地理的環境や園児家庭の収入階層等の種々の点において、わたくしたちに与えられうる範囲内での知識と情報とを考慮に入れ、それらが、より都区内外全体の幼稚園を代表するものになるよう努めた。

調査園児数は、表 1 に示される通りである。意識調査と教育費調査数にずれがあるのは、意識調査のみの記入があったためである。回収率は、各園によって相違があるが、意識調査平均は約六十六%、教育費調査が約六十四%であった。

調査方法は、各幼稚園の先生を通して園児父母に調査表を渡し、園児教育費に関する一カ月間の支出経費を記入していただいた。回収は、同封の封筒に入れ、やはり幼稚園の先生を通して集めていただいた。

調査内容は、

(一)、家庭及び通園状況

(二)、教育費の記録

(三)、意識調査

に大別される。

くわしい内容は、それぞれの報告の都度触れることとし、今回は、(二)の教育費の記録からみた園費及び家庭教育費の概要と、園児の家庭の年収額について述べたい。

## 二、教育費の実態

本調査の「幼稚園児の教育費調査表」より「教育費の記録」を抜き出し、その集計結果の概要をここで述べてみたいと思う。

記録は、先に述べた一カ月の間に園児のために支出した教育に関する費用を、その内容とともに、支出のあったたびごとに記録簿に記入していただく方法をとった。

集計にあたっては、この各家庭でつけていただいた一カ月間の教育費の記録を、文部省の「父兄が支出した教育費」(注、文部省が昭和二十七年以来、全国の小・中・高校生を対象に行なっている教育費の調査)の集計分類に基づいて取り出した。

教育費の内容は、大きく園費と家庭教育費に分け、それを合

計したものを教育費総額とする。園費は主として幼稚園に納めるもので月謝、教材費、絵本代、協力費、設備費、PTA会費(母の会費)、給食費、お誕生会・遠足等の幼稚園の行事に関する費用、通園費等が含まれる。家庭教育費は、幼稚園に納めるもの以外で家庭で園児の教育のために支出する費用で、たとえば、学習塾、家庭教師、おけいこ、文房具、本、おもちゃ、楽器、家庭でのお誕生会、およばれ、動物園や遊園地等の見学入場料等が含まれ、特に現金で渡すおこづかいもこの中に入れることにした。なお、教育費という概念が幼稚園児の場合、かなり曖昧なものとなるが、ここでは園児の養育のための費用のうち、主として教養に関するものを選んだ。

このようにして、幼稚園児一人当たり、一カ月の教育費を、国立、公立、私立の幼稚園別およびこれらを合わせた全体の平均として算出した。

### 1 教育費別にみた幼稚園児一人当たり、一カ月の費用

#### (1) 教育費総額

表2に示したように、都内の国公私立幼稚園児全体の一人当たり、一カ月の費用は、約一一、五〇〇円であった。これを国公私立別にみると、国立が約九、五〇〇円、公立が約八、四〇〇円、私立が約一二、八〇〇円となり、当然のことながら私立が

表 2 都内幼稚園児1人当り、1ヵ月教育費  
(昭和47年11月) ( ) 内は割合 単位: 円 %

幼稚園 教育費	教育費総額	園 費	家庭教育費
全平均	11,537 (100)	5,449 (47)	6,088 (53)
国 立	9,471 (100)	4,305 (45)	5,166 (55)
公 立	8,365 (100)	2,479 (30)	5,886 (70)
私 立	12,767 (100)	6,439 (50)	6,328 (50)

立別に分けると、国立が約四、三〇〇円、公立が約二、五〇〇円、私立が約六、四〇〇円となり、金額の高い順から私立、国立、公立であった。私立の六、四〇〇円は、公立の約二・六倍、国立の約一・五倍にもなっている。

### (3) 家庭教育費

全体の平均は約六、一〇〇円であった。これを国公立別にみると、国立が約五、二〇〇円、公立が約五、九〇〇円、私立が約六、三〇〇円となり、金額の高さからいくと私立、公立、国立の順となった。国立に比べて公立は約一・一倍、私立は約

最も高く、次いで約三、〇〇〇円の差で国立、さらに約一、〇〇〇円の差で公立という順序となった。

### (2) 園費

次に園費をみると、これも教育費総額の動きと同様で、全体の平均が約五、四〇〇円、これを国公立

一・二倍でこれら三者の間にはそれほど大きな差はみられなかったが、園費の最も高い私立の幼稚園が家庭教育費においてもやはり最高額を示し、園費とほぼ同額の支出をしていた。このことは次の家庭の収入ともいくぶん関連がある。

表2からこれらのことを教育費別にグラフにすると図1のようになり、その動きが一層明らかとなる。

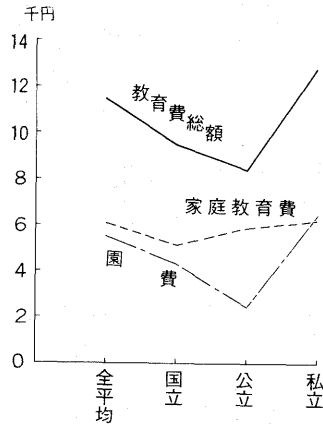
### 2 国・公・私立別にみた幼稚園児一人当り、一ヵ月の費用 (1) 国立幼稚園の場合

これは調査の不都合上、一園のみの回収となり甚だ残念であったが、その点を考慮に入れて国立の実態をみたいと思う。園費と家庭教育費を合わせた教育費総額は、約一〇、〇〇〇円であった。その内訳をみると、家庭教育費が園費よりわずかに高く約五、二〇〇円で、教育費全体の五五パーセントを占め、残りの四五パーセントが園費であった。

### (2) 公立幼稚園の場合

一ヵ月当りの教育費総額は国立に比べて約一、〇〇〇円安く、八、四〇〇円であった。そのうち園費はわずかに二、五〇〇円で、教育費全体の30%にすぎず、家庭教育費が約五、九〇〇円と70%も占めていた。ただし、これは二園の調査の平均なので必ずしもこの数字が公立の実態を代表しているとはいえないか

図1. 都内幼稚園児1人当たり1カ月教育費



もしれない。

i 都内幼稚園児一人当たり、一カ月の父母が負担する教育費は、約一一、五〇〇円である。そのうち主として幼稚園に納める費用は約五、五〇〇円であるが、それ以外にも家庭でおいけごとをさせたり、文房具、絵本、おもちゃ、楽器購入等、園児の教養のための費用として、園費とほぼ同額の約六、〇〇〇円を支出している。

ii 国立、公立、私立別にみた教育費は、当然のことながら私立の幼稚園が最も高額であり、次いで国立、公立の順となる。これは園費の差によるところが大きく、家庭教育費にはそれほど著しい差はみられない。なおこれら教育費の詳細はいずれ次の機会に検討したいと思う。

### 三、園児の家庭の収入について

(3) 私立幼稚園の場合  
教育費総額が一カ月約一三、〇〇〇円と、他の国・公立幼稚園に比べて著しく高い。とりわけ任意に削ることのできにくい園費が約六、五〇〇円と教育費全体の50%を占め、金額の上で国・公立と大差のあることは、全幼稚園の中でも私立の幼稚園が圧倒的に多数を占めているだけに大きな問題であるといえよう。家庭教育費は園費とほぼ同額の六、三〇〇円であったが、これも他の国・公立幼稚園に比べるといくぶん高くなっている。以上のことをまとめてみると次のようなことがいえよう。

次に、園児の教育費支出額に最も深い関連を持つと思われる、園児の家庭の収入についてみてみよう。子どもが幼稚園に通っているような家庭の収入は、いったいどの位なのだろうか。表3は、その年間収入を六〇万円未満から二〇万円きざみで二六〇万円以上までの十二段階に区分した場合、どの階層にどの位の家庭が入るかを割合で示したものである。先の教育費の実態で行なったように、園児の家庭の年収も、国公立別にわけ、

図2. 都内幼稚園児の家庭の年収

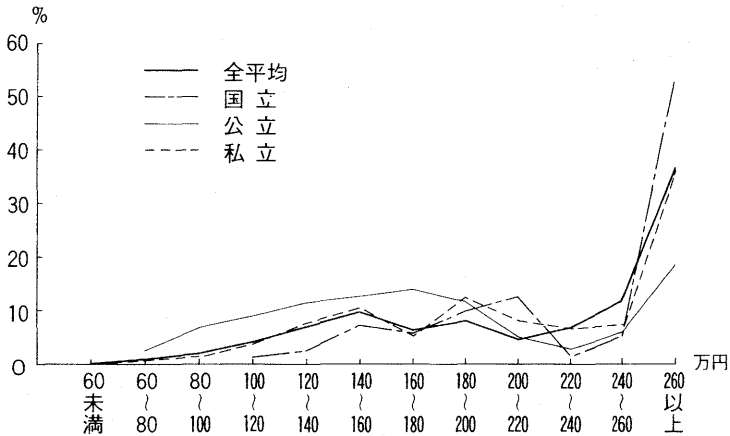


表 3 都内幼稚園児の家庭の収入

単位: 万円  
%

年 収 階 層 幼 稚 園	60 未満	60 ＼ 80	80 ＼ 100	100 ＼ 120	120 ＼ 140	140 ＼ 160	160 ＼ 180	180 ＼ 200	200 ＼ 220	220 ＼ 240	240 ＼ 260	260 以上
	60 未満	60 ＼ 80	80 ＼ 100	100 ＼ 120	120 ＼ 140	140 ＼ 160	160 ＼ 180	180 ＼ 200	200 ＼ 220	220 ＼ 240	240 ＼ 260	260 以上
全 平 均	0.2	1.0	2.0	4.1	7.5	10.0	6.5	8.3	4.8	7.1	11.6	36.1
国 立	0	0	0	1.4	2.8	7.0	5.6	9.9	12.7	1.4	5.6	53.6
公 立	0	2.5	6.4	8.9	11.5	12.7	13.9	11.5	5.0	2.5	6.3	18.8
私 立	0.3	0.9	1.5	3.6	7.6	10.2	5.1	12.3	8.2	6.6	7.6	35.6

比較してみた。表3をよりわかりやすくとらえるためにグラフに表わしたのが図2である。このグラフをみると、一四〇万円から二二〇万円の間でゆるやかな山型を示しながらも、年収の最高階層である二六〇万円以上でその割合が急上昇しているのがわかる。この調査にあらわれたかぎりでは、幼稚園児のいるような若い両親もかなりの高収入を得ていることになる。わたくしたちは今回の調査にあたって、四、五歳の子どもを持つ若い両親というイメージから、年収六〇万円という、およその月額五万円程度の階層から区分設定をしたのだが、この調査対象に限って言えば、二六〇万円以上の高額階層を、もう少し細かく区分すべきだったと、その高額に少しく驚き

の念を持ちつつ、反省しているところである。

では、その年収の最高階層である二六〇万円以上の家庭が六四パーセントにも及ぶ、国立A幼稚園の場合をみてみよう。図2にも示されるように、ここでは、年収一〇〇万円以下の家庭は全くない。最高階層の二六〇万円以上に続く高い割合をしめるのは、一八〇万円から二〇〇万円の階層である。この幼稚園は、国立の名門校の附属幼稚園として、その伝統もあり、高校までそのまま進学が可能な上に、その環境も内容も高く評価されており、その入園は、毎年二〇一三〇倍といわれている。まさに受験競争の悲喜劇を、幼児は三、四歳にして味わうわけである。そのため、通園の便は少し位悪くても、ぜひ入園させたい、と願う教育熱心な父母が多く、完全な送り迎えが必要とされる。このため、母親がパートなどの勤めに出ず、家事育児に専念できるような家庭が多く、その結果として、年収二六〇万円以上の家庭が半数以上をしめるような裕福な家庭が多く集まったと思われる。

次に、その増設が強く要望されている公立幼稚園について、その年収をみてみよう。公立幼稚園における家庭の収入は、図2の細い実線で示されるように、一四〇万円から一六〇万円の階層をやまに、ゆるやかなカーブを描いており、国立、私立の

幼稚園と比較し、その年収が平均化されていることがわかる。

最高階層の二六〇万円以上も、わずか19%である。わたくしたちは、この公立幼稚園に通わせている家庭の年収カーブが、都内の幼稚園児を持つ家庭の年収を、ほぼ代表しているのではないかと考える。その平均年収は一七〇万円であり、ボーナス等を除いた平均月収約一十一万円といった家庭である。みなさんの日ごろの実感とくらべて、この額は、いかがなものであろうか。先の教育費の実態で述べたように、国立の園費が四、三〇〇円、公立が二、五〇〇円、私立が六、四〇〇円である。もちろんこの額は、園児一人あたりの額であるから、二人の幼児を私立幼稚園に通わせれば、一三、〇〇〇円近くを園費として支出し、さらに家庭教育費として、一人平均六、〇〇〇円相当を支出するとしたら、幼児の教育費だけで二五、〇〇〇円もの支出となる。さらにこれに食費、被服費等が加わることはいうまでもない。公立の園費が一人あたり平均二、五〇〇円というのは、ごくあたりまえの生活を送る若い両親にとって、大きな魅力と助けになるに違いない。

最後に、私立六園についてみてみたい。図2の点線が示すように、二六〇万円以上の最高階層に約36%、ついで一八〇一二〇万円と一四〇一六〇万円の階層がそれぞれ約8%で、二つのゆ

るやかな山をつくっている。はじめに触れたようにわたくしたちはこの私立六園を、その地域や収入階層の点において、できうるかぎり都内全体の園児の家庭を代表するよう、対象選択を行なったので、いわゆる、高階層の子女を集めるので名高い幼稚園も、その地域の幼児たちが歩いて数分で通えるような、その地域の幼児のためのごく一般的な幼稚園をも、その中に含んでいる。そのため、その年収も、六〇万円未満から最高階層まですべての階層にわたっている。この私立幼稚園内での分類結果は、いずれ次の機会に述べることとしたい。ただ、高額の園費を支払わねばならない私立幼稚園に、公立幼稚園での平均年収一七〇万円にもみえない家庭が24%もあるということに留意したい。(公立は42%)おそらく、これらの家庭の父母は、安い園費で子どもに幼稚園教育をうけさせられる公立幼稚園への入園を切望しているであろうが、公立幼稚園の絶対数の不足という現実が、それをばんでいると思われる。就学前にほとんどの幼児が幼稚園に通い、その義務教育化すら提唱されている現在、高い園費を父母から集めなければ経営のなりたない私立幼稚園児数の全園児数にしめる割合が、75%にも及ぶことは、注目すべきことであろう。ここに私立幼稚園への公費援助が必要とされるゆえんがある。今年度になって、私立幼稚園への助

成金が地方自治体によって負担される動きがあらわれてきたことは、幼児を持つ家庭にとって明るいニュースである。それとともに、公立幼稚園の増設が進められるべきであることは、いうまでもない。

園児の家庭の年収額と教育費支出との関係については、後で改めて触れることにする。次回の報告は、幼稚園教育や幼児の進路に対して父母がどのような考えを抱いているかについて述べたいと思う。

(お茶の水女子大学 大学院生 家政学部家庭経営学科)

# 幼児の観察研究

## Ⅰ 活動の発展についてⅠ

幼稚園で、子どもがひとりで遊んでいるよりも、二人、三人で遊んでいる方が、また、一種類だけの遊びよりも、何種類もの活動と関連する方が、より発展した遊びであろうか。たとえば、ひとりで電車を作っているよりも、駅をつくる子どももいたり、切符を切る子どももいた方が、より発展した活動であり、より望ましいと考えられるのだろうか。このことをどう考えるかということは、現場の保育者の行動会般に関連するように思う。

ここでも、「発展」ということを見るのに、外側からと内側からと、二つの面からの見方がある。大人の目にとまりやすい外側の面からみると、人数が増し、活動の種類が増すと、より発展したとみなされよう。行為の当事者であ



津 守 真

る子どもの側からみると、そこに無理が生じている場合もあるし、自分自身の内面的な発展とは何も関係のない場合もある。逆にいうと、子どもが内面的に充実し発展しているときに、外からみたところでは、同じ活動の継続であったり、ひとりあそびの継続である場合もある。また、あるときには、内面の発展が同時にはなやかな外面の活動となつてあらわれることもある。

このことを、保育の実例に即して、もう少し具体的に考えてみたい。

次にかかげる事例は、以前に本誌に掲載したことのある五歳児の記録の中の例である。この事例は、私が感動をもつてふれた場面の一つであり、何度も思い返し、人にも話



してきたものである。この場面に立ち会って、私自身教えられることが多かった。そして、最近また、この場面を考えて、この保育場面にふくまれている幼児教育の課題に気付いたので、この記録をとり上げてみたい。

### 一、ヨットつくり itiner 保育の記録

男児Tが、ダンボールの箱の底にしいてあった、一面がベコベコした紙をもって歩いている。先生がTをみて、

先生「Tちゃん、その紙、何かになりそうね」

T「階段になるよ」

先生「それもいいわね」

T「まどで　こういうときつかうのね」

先生「そう、それもいいわね」

T「どうやろうかな、これ」

先生「どうやったらいいかしら」

T「なにか　四角い箱にくつつけるの」

Tは結局、ヨットをつくりはじめる。（ほかにも、ヨ

ットらしいものをつくっている子どももある）

T「海の中で泳ぎたいときは、ギー　ガチャン」などいいながら、箱の一面を切り開いて、窓のようなものを作

っている。

Tは窓をあげ終わり、

T「『この中に食べものを入れておくんだよ』と隣りの子どもにいう。

~~~~~

先生はTのところに布の入っている箱をもってきて、

先生「Tちゃんたち、布もあるわよ、三角やこういう布、帆になるわよ」

先生「ほら、こういう布もあるわよ」

Tは帆をつけ終わり、先生をさがしに行く。

T「せんせい、ほら、ヨットができたよ」

先生は、ヨットを見ながら、色をぬった方がよいこと、舵をつけた方がよいことなど話す。……中略……

先生は、Tたちが作っているようすを見て、大きい青い紙を出してくる。

先生「できたヨットを海に浮べましょう。ここに並べて

ちょうだい」……

Tは先生と一しょに、港を青い紙にはる。

最初から、ほぼ一時間半くらいの時間がたっている。

## 二、子どもが自分の活動を見いだすまで

この場面に、私がひきつけられたのは、何だったのか。

そのひとつは、この記録の前半で、子ども（T）が、ベコベコ紙をもって歩いているところから、ヨットを作りはじめるところまでの、先生との間で展開した過程である。

ここでも、Tの行動を、Tの世界の表現として見る立場から考える。Tが、その紙をもってうろうろと歩きまわり、作ろうとするものが何回も変わっていることは、Tの側に、何ものかにいきあたろうと求めつつ、それが得られないでいる世界があるのを見ることは容易である。そのときの先生は、このTの側に生じている世界を見ていることも明らかである。Tがその何ものかにいきあたるように、先生は声をかけている。

「その紙 何かになりそうね」「それもいいわね」「そうそれもいいわね」「どうやったらいいかしら」など。それは先生にもわからない世界だから、先生のことばも、このように不特定であり、いろいろの可能性をふくんでいる。Tは、いろいろのことを意識に上らせながら、どこかに固執させられることもなく、これを思うものにいきあたるま

で、さまざまな可能性をたしかめつつ、ゆっくりと回転する。そして、ヨットをつくるということに落ちつく。

この日は、先生はペープサートにとりかかりたく思っていた。ところが、そのために用意した材料を、ここに見るように子どもは別のことに使った。このことも、この日の私にとって印象的なことであった。

この場面で、Tが混とんの中から何ものかを見いだす過程は、この例に特殊なことではなく、他の場合にも、数多く見られることである。あまりにも数多くの例があり、そのいくつかはすでに述べてきたことでもあるので、引用するまでもないであろう。それらと共通の過程をここでも見ることができ。混とんの中に中心を見いだすときには、それをめぐって全体が統合される。しかし、統合された形の背後には、常に形なき混とんがあり、中心が見いだされた次の瞬間に、全体は解体して混とんにもどる。このこともまた、多くの観察例から見ることができるのであるが、ここではこれ以上ふれない。

この記録の前半は、人が自分の活動を見いだすまでの過程の原型を示すものであった、ここで私が新たにいきあた

った問題がある。それはこの記録の後半である。

### 三、「活動の発展」について

前半と後半をつなぐ部分に、Tがヨットをつくりはじめるところがある。Tは箱の一面を切り開いて窓をあける。

「海の中で泳ぎたいときは、ギー ガチャン」というとき、窓から外に出る運動が想像されている。Tは窓をあけ終わり、「この中に食べものを入れておくんだよ」という。箱

の中、すなわちヨットの中には、食べものがある。「ヨット」は子どもにとり、その内部に食べものをいれることができるものであり、外部に出入することのできるものであることがわかる。舟には「内部をもったかこみ」の原型が蔵されている。Tがヨットというとき、まずこの原型を見ていたということができよう。そのことは、保育の最中にも気付かれうる可能性はあるが、気付かれねばならぬというものではない。後になって見直すときに、明瞭にとらえることができる。さらにここで考える課題はむしろ次の点である。

先生は布の入った箱をもってきて、帆をつけることにもっていかうとした。また、大きな青い紙を出して、海らし

くしようとした。そのことにより、Tのヨットは、ヨットらしい形体をもつようになり、海と港という景色ができた。以前には私は、これは活動の発展、展開であると考えた。そして、布の箱や青い大きな紙を先生が持ち出すことは、活動の発展のために必要な具体的な配慮であると考えた。しかし、いま、これを見直すときに、いくつかの疑問が生じる。

第一には舟の内部という内部の原型と基本とする活動が、突然中断されて、それ以後、あらわれていないことである。子どもには、物の内部やかこみの内側は特別の魅力がある。おくり物は、箱にいれて幾重にも包装紙で包むときに、子どもは胸をときめかせながら次々に開いて中味に近づいていく。扉のびったりと閉じた部屋の内側をのぞいて見たいという衝動は、だれもが持っている。子どもは、犬や猫の体の中にも、樹木の中にも、内部の空間や食卓のある居間を夢みるのである。船というのは、内部そのものであり、広く大きな海の中で、自分を守ってくれる内部である。子どもが船をつくるというときには、船の形体よりも、内部そのものの関心であることが多い、この事例でも、箱その

ものが船であり、これに窓をあけて「この中に食べものを入れておくんだよ」といつている。子どもはヨットをつくらうといったときに、このような「かこみの内部」を思っていたのかもしれない。しかし、その以後の活動は、ヨットの外形や港の構設となり、子どものもつ内部のイメージから離れたものとなってしまった。その活動は、もっぱら、大人が構成した意図に順応することに向けられ、原型イメージを失っているのではないだろうか。

第二には、一体、活動の発展とは何であろうかということである。大人の目に見えるところで活動が豊富になり、空間がひろく用いられ、長時間続くならば、活動が発展したことになるのであろうか。大人に見える世界での活動の発展は、子どもの内的活動の活発さを保証しないであろう。子どもが物ととりくみ、あるいは他の子どもとともに遊びに没入して、その物のもつ原型にまでふれる体験となっていくとき、そこに内的な活動の発展がある。この事例でいうならば、「内部をもったかこみ」のイメージとしての舟について、もう少し子どもが遊びを進めていったならば、子ども自身の活動の発展となつて、もっと違った形になつて進行したかもしれない。それが、大人が外面的に活動の

発展をねらったために、阻止された点がある。表面的な連想や想像をこえて、原型イメージに達するときに、子どもとしても満足なものとなるのであろう。「活動の発展」の考え方が、見える世界における発展のみにとらわれてはならないであろう。

現代の幼児教育の基礎をなした、米国における「進歩主義教育」を私は高く評価するものであるが、そのカリキュラムは、大体において、外的活動の発展を基本とするものであり、そこに幼児教育の考え方としての問題があるように思う。子どもの内面の発展に重点をおくときには、でき上りは大人が期待するようにならない場合が多いであろう。時には、大人には子どものすることの意味がわからないかもしれない。大人から見ると、中途半端でやめてしまつて、それ以上は望まないかもしれない。作る過程だけが子どもにとって価値があつて、でき上つたらすぐにこわしてしまふかもしれない。そのことの積み重ねで一日が終つてしまつても、子どもにとっては満足な一日であろう。内的活動の発展は、目に見えた形にあらわれない場合も多い。

才三には、大人自身の活動が、生きて動いているかどうか

かということが子どもに影響があるということである。大人が単に子どもの外的活動を発展させようとする意図の場合には、大人の側に、自分もその活動の中に、よろこびや、やりがいを見いだせるような生きた生活がない。生きた生活のあるところでは、物の外形をこえて、物の見えない本性にまでふれることができる。砂ととりくむこと、固い木ととりくむことなど、いずれも、砂や木でつくられる形の結果を問題にしているのではなく、形のないものから形をつくる過程、あるいは、形のあるものを変形させていく過程に重要な体験がある。

この例に即しているならば、先生がペープサートの予定をやめてまで、もにこのことをやらせてやりたいと思うた、その活気が子どもに伝わったと思う。先生は、子どもが心の中に実現したいと願っていることは何であるかをさぐり、子どもの心に近づいて感じる努力をする。それは自らの心の中に共通のイメージを見いだそうとする努力でもある。その努力が先生に、「それもいいわね」「そう、それもいいわね」「どうやったらいいかしら」といわせる。

子どもが舟をつくりはじめると、先生の側に舟の勉強がはじまる。進歩主義教育のカリキュラムだと、ここで、船

が航海するときには船の中に持ちこむものは何か、船の帆はどのように風を受けて走るか、船は港で何をするか、港の機能は何かなど、先生自身の勉強が要求される。幼稚園で何時間もかかって汽車をつくったり、動物園を作ったりするとき、先生も一しょになって、それに関連することを勉強していると、その活気が子どもをその單元の中にさそいこむ。子どもはそこから自分のものをもって、自分の活動を展開する。そうなるときには、活動の外的発展と内的発展とは一致してくる。つまり、大人が発展と考えて用意した意図そのものが発展に役立つのではなくて、大人がそれと取りくむ生きた熱気が、子どもをもその渦の中に巻きこんでいるのだと思う。その熱意や研究心の失われたところでは、発展のために予定された活動は、子どもの生きた活動をしばらく、子どもの精神的負担となってしまう。そのような保育によって悩みを感じている幼児の例にも、私どもはしばしば出会うのである。

現在、あちこちで見られるいわゆる單元保育には、活動の外的発展にのみ気がとられている場合が多いように思う。郵便屋さんといえ、大人の生活や社会の中で郵便と関連のある活動を並べて、それを段階づけ、四日か五日に配分

して予定を組み、それに合わせていくような保育が多く見られる。そこには、子どもがゆつくりと物そのものにとり組んで、物の本質を感じ、知っていく余裕もない。先生の側にも、そのものと取り組んで勉強していくだけの時間がない。また、予定を進めることに追われて、先生自身が、じかに子どもの感じていることにふれるゆとりがない。それでは、先生にも子どもにも生きた生活が失われてしまう。

もっと子どもの内的活動が発展するように、それには、子どもの内面に、物にふれて感じるイメージが生まれるような生活がたいせつである。それがかならず保証されるのは、子どもが自然物にふれるときである。ゆつくりと自然物ととりくむことができるとき、砂、土、水とのとりくみ、戸外の風の中で走りまわること、木の実や葉であそぶこと等々、同じ物であっても、子どもによって、さまざまな感じとり方がなされる。それは、すべての精神活動の母胎でもある。大人の連想によって作られたごっこあそびの定式による単元活動のわくをはずして見なければならぬ。そうすると、子どものたぎの姿が見えてくる。

ここにかかげた保育の事例は、私はまれにみるすぐれた保育であると思う。この後半の部分から、いわゆる単元保育のもつ問題点に及んだが、この事例では、全体がいきいきと動いており、子どもは満足している。

最近、この保育の担任者である堀合教諭と話したが、この記録の前半は、いつの保育にも共通のたいせつなものを示していること、後半は、一考を要する問題をふくんでいることで意見が一致することができた。それはひとつには、子どもの環境から急激に自然が失われ、それとともに、子どもの生活からいろいろの点で自然さが失われてきたこと、社会全体のいそがしさが子どもの生活にまでおしよせてきたことなど、時代の変化にもよるのであると思われる。

この時代にとくに、幼児教育は目に見える成果を追うのではなく、子どもの内面に湧き出る生命力を育てることに力を注がねばならないと思う。

# 移動動物園を

迎えて

野 辺 繁 子



子どもたちが待ちに待った移動動物園が訪問してくれる日、あいにくこの日は前日とはうって変わった雨降りで、がっかりしてしまった。園庭で遊ぶ計画を変更して保育室を「モルモットとうさぎ」「はつかねずみ・砂ねずみ・チャボの親子」「あひる・がちょう・かも」の三つにわけ、遊戯室のステージはチンパンジーのサッチャン、フロアーの広い所はやぎさん、と入口にそれぞれ紙に書いてはった。

十時すぎに、ライトバンの助手席にベビー毛布にくるまれてサッチャンが着いた。子どもたちは大喜びで全員テラスへ出て迎えた、寒いのでサッチャンは機嫌がわるく、ストーブのそばで充分暖まってから、子どもたちと握手をしたりピアノを叩いたり、ミルクをスプーンで上手にのんだりした。始めはびつくりして手も出せなかった子ども

もが、だんだん馴れて、そつとさわってはうれしくなり「先生、おばあさんの手みたい」「手がちゃんと曲ったよ」「まっ黒い手で、よごれているのかな」など目をかがやかせて報告にきた。

おひるになるとサッチャンは、いすの上いきちんとひざを揃えてすわり、子どもたちといっしょにお弁当を食べた。飼育係の小父さんの手製の食事がお皿の上きれいに並んだ。食パンの蜂蜜つき、レタス、バナナ、みかん、にんじんを「いただきます」と頭をさげてから上手にフォークにさして食べるのを見て、子どもたちは驚いて声も出なかった。食事のおそい子、こぼす子も行儀よく、早く、残さず食べ終わった。先生が言葉で注意するよりも効果があった。バナナを一本余分に持つてきて「サッチャンにあげて」と小さな声でさし出した子ども何人かあった。

やぎも抱きやすい大きさで、子どもたちは一生懸命に教えられた通り、落とさないように抱いていた。子やぎが乳をのんでいるのに人気が集まった。

やぎに餌の与え方もわかり、子どもたちはやぎとかけっこもできた。「ころころころんちをした」といっては喜び「かけっこで勝てた」といっては得意になっていた。

始めはただ眺めていた子も、小さなねずみの赤ちゃんを手のにせてもらって緊張の中にもうれしそうに顔をほころばせていた。

あひるの部屋では子どもたちが手をつないで円周にそって歩くと、中のあるも中心に集まって、子どもたちのきざんだ餌をたべたりした。部屋を出る時に、あひるのあるき方をしている子どもも何人かみかけられた。

モルモットとうさぎは、雨のために砂場が使えず積木でつくった遊び場で遊んだ。「かくれんぼが好きだ」「両方ともたべ方が同じね」という声も子どもたちの口から聞こえた。

動物園でのおりの中の動物を眺めたり、子どもも動物園で動物をさわったりするより、自分たちの園に迎えたかわいなお客様という気やすさからか、いっしょに遊んだり餌を与えたりしている生活の中に、子どもたちは動物の習性や特徴に気づき、やがては美しい愛情も育っていくようである。スナップ写真にうつっている子どもたちの表情からも、都会の幼稚園の子どもたちに必要なものは何だろうかと今さらのように考えさせられた。卒業式の折、父兄から、幼稚園でなくては味わえないよい経験だったと感謝された。

動物と遊んだ保育室は、五歳児と先

生で楽しそうに掃除をすませ満足のようにすだった、子どもたちからの発案だったとあとで知ったが、小さな子どもたちにも働くことの喜びが遊びの中から育っていくように思われた。こわがることを心配していたが、そうした子どもがほとんどみられなかったのは、日常動物の世話に馴れていたこと、先生方自身も楽しんで動物に接し、幼児が動物を迎えて楽しく遊ぼうとする期待をもつよう、前もって準備していたことなどが考えられる。

動物たちは、きた時と同じようにライトバンにのせられ、気候のよい秋に再びくることを子どもたちと約束して、一時半ころ帰っていった。

(浦和市木の実幼稚園)



6月号 幼児教育の源流Ⅴ コメニウス 参考文献(その二)

- ⑬堀内 守, コメニウス教育学の方法研究の前提, 教育学研究, 昭和38年, 第30巻4号
- ⑭堀内 守, 神の三書性とコメニウス教育学的方法的發展, 教育哲学研究, No. 8
- ⑮ク コメニウスにおける教育学の方法の成立, 東京都立大学人文学報No.47
- ⑯長田 新, 自由解放の教育学—コメニウス教育学をどうみるか, 教育学研究, 昭和34年, 第26巻3号
- ⑰荏司雅子, 宗教的感覚的實在論—コメニウス「大教授学」の意図, 教育科学10.
- ⑱聖書
- ⑳K. Schaller, Die Pampaedia des J. A. Comenius, Quelle u. Meyer, 1963.
- ㉑J. A. Comenius, Pampaedia, Quelle u. Meyer, 1965,
- ㉒J. A. Comenius, Informatorium der Mutterschul, Quelle u. Meyer, 1962.
- ㉓K. Schaller, Die Padagogik des J. A. Comenius Quelle u. Meyer. 1961.
- ㉔J. A. Komensky, Analytische Didaktik und andere pädagogische Schriften, volk und wissen, 1959.
- ㉕J. A. Comenius, Grosse Didaktik, volk und wissen, 1957.
- ㉖Robert Alt, Der fortschrittliche Charakter der Pädagogik Komensky's, Berlin 1953.
- ㉗Unesco, John Amos Comenius Selections, 1957.
- ㉘Lewis Mumford, The Condition of Man, 1944, London.

○その他

幼児の教育 第七十二巻 第七号

七月号 定価二二〇円

昭和四十八年六月二十五日印刷  
昭和四十八年七月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一  
印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番  
◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレイベル館にお願いいたします

# 現代幼児教育研究会全国大会



- テーマ 知的発達の基礎となるものは何か
- 日時 昭和48年7月31日(火)8月1日(水)2日(木)
- 会場 福島市市民文化センター他
- 宿泊 福島市飯坂温泉
- 会費 1,000円(資料代ほか)※宿泊費等は別

## ●第1日目

開会式  
オリエンテーション  
シンポジウム  
アトラクション

## ●第2日目

分科会  
ミーティング

## ●第3日目

分科会報告  
記念講演  
閉会式  
観光

## ●講 師

三木安正先生  
海 卓子先生  
平井信義先生  
山村きよ先生  
藤田復生先生  
小林純一先生  
磯部 徹先生  
藤田妙子先生

山内昭道先生  
伊藤 昇先生  
本吉園子先生  
(順不同)

ボニージャックス  
フレーベル少年合唱団

フレーベル館







# 夏空へジャンプ!!

—— フレーベル館の夏の用品 ——

## ナックあそび着

園児の体型と行動を十分に研究した軽快なあそび着です。  
袖なしはゆったりとした丸くび型で丈夫で軽く、洗っても縮みません。男児用ブルー、女児用ピンク。

●リトルカシミア使用。サイズはLL、L、M、Sの4種類。

袖なし……………各 360円

キンダープール(A)……………52,000円

キンダープール(B)……………40,000円

魚つりセット…………… 1,400円

キンダーカラーすのこ…………… 6,000円

デカデカボール…………… 900円

エッグボール…………… 450円

株式会社 **フレーベル館**